

2009 年度 修士論文

# 我が国のデフバレーボールの 普及、発展に関する研究

Research on Popularization and Development of  
Deaf-Volleyball in Japan.

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科  
スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域

5008A012-6

大川 裕二

研究指導教員： 平田竹男 教授

## 目次

|      |                               |    |
|------|-------------------------------|----|
| 第一章  | 序論                            | 4  |
| 第一節  | 研究背景                          | 4  |
| 第二節  | 研究目的                          | 5  |
| 第二章  | 研究手法                          | 6  |
| 第一節  | 我が国のデフバレーを取り巻く構造の分析           | 6  |
| 第二節  | 障害者スポーツ他種目（車椅子バスケットボール）との比較   | 7  |
| 第三節  | ドイツデフバレー代表関係者へのインタビュー調査       | 7  |
| 第三章  | 研究結果                          | 8  |
| 第一節  | 我が国のデフバレーを取り巻く構造の分析結果         | 8  |
| 第一項  | 我が国におけるデフバレー組織体制              | 8  |
| 第二項  | デフバレーにおけるトリプルミッションの「勝利」について   | 10 |
| 第三項  | デフバレーにおけるトリプルミッションの「市場」について   | 15 |
| 第四項  | デフバレーにおけるトリプルミッションの「普及」について   | 20 |
| 第二節  | 障害者スポーツ他種目（車椅子バスケットボール）との比較結果 | 26 |
| 第一項  | 代表チーム成績の比較                    | 27 |
| 第二項  | 連盟収入構造の比較                     | 28 |
| 第三項  | 車椅子バスケットボール普及について             | 30 |
| 第三節  | ドイツデフバレー代表関係者へのインタビュー調査       | 32 |
| 第四章  | 考察                            | 35 |
| 第一節  | 「勝利」                          | 35 |
| 第二節  | 「市場」                          | 38 |
| 第三節  | 「普及」                          | 42 |
| 第五章  | 結論                            | 45 |
| 謝辞   |                               | 47 |
| 参考文献 |                               | 49 |
| 附録   |                               | 51 |

## 図表目次

|      |                                   |    |
|------|-----------------------------------|----|
| 図 1  | トリプルミッションモデル（平田・中村 2006）          | 6  |
| 図 2  | 財団法人全日本ろうあ連盟組織図                   | 8  |
| 図 3  | デフスポーツを取り巻く組織図                    | 9  |
| 図 4  | デフリンピックにおける男子バレーボール競技成績比較         | 10 |
| 図 5  | デフリンピックにおける女子バレーボール成績比較           | 11 |
| 図 6  | デフバレー代表の選手構成                      | 13 |
| 図 7  | デフバレー協会収入額の推移                     | 15 |
| 図 8  | 日本デフバレーボール協会会員数推移                 | 20 |
| 図 9  | 聾学校数の推移                           | 22 |
| 図 10 | 聾学校の生徒数の推移                        | 22 |
| 図 11 | 聾学校の体育教育組織図                       | 24 |
| 図 12 | デフバレーチーム数                         | 24 |
| 図 13 | 日本デフバレー協会と車椅子バスケットボール協会の収入比較      | 28 |
| 図 14 | 車椅子バスケットボールの選手層                   | 30 |
| 図 15 | デフリンピック出場基準                       | 36 |
| 表 1  | 平成 20 年日本デフバレー協会決算内訳              | 16 |
| 表 2  | 平成 21 年度日本パラリンピック委員会加盟競技団体評価ランキング | 17 |
| 表 3  | デフバレー協会の主要事業                      | 18 |
| 表 4  | デフバレー主要大会の比較表                     | 19 |
| 表 5  | ジャパンデフバレーボールカップ開催地                | 21 |
| 表 6  | 日本男子代表チームメンバー                     | 23 |
| 表 7  | 日本デフバレーボール協会と日本車椅子バスケットボール連盟の組織比較 | 26 |
| 表 8  | デフバレー日本代表と車椅子バスケットボール日本代表の成績推移    | 27 |
| 表 9  | JPC 所属の競技団体                       | 41 |

## 第一章 序論

### 第一節 研究背景

聴覚障害はコミュニケーション障害とも言われる。聴覚障害者（以下、デフと記載）は、外見上で健聴者との違いがわからず通常の世界生活を営んでいるとみられているが、他者と交わり、コミュニケーションを前提として成立している社会で、その能力の欠如は大きなハンディキャップとなる。また、障害が重くなると文章力や文章理解力、口述にさえもハンディキャップを負うため、二次的障害として情報を発信しがたいという特性を持つ。聴こえないことは、伝えられないことでもあり、すなわち存在はしているものの、周囲から置き去りにされてしまうと言えるだろう。

このことは我が国のデフのスポーツにおいても同様である。確かにデフは身体的に健聴者と同じルールでスポーツができる。しかし、レベルアップを狙い、大会にエントリーする等の場面でコミュニケーションに困難が生じ、情報や知識を得られずにスポーツに触れる機会を逃すこともある。

デフの中で独自に発展を遂げてきたデフスポーツというカテゴリーがあり、我が国ではあまり存在を知られていない。一方、欧州ではデフスポーツが認知され、デフがスポーツに触れる機会の多い国もある。

なお、パラリンピックは障害者のオリンピックと言われているが、これにデフは出場できない。デフリンピック（Deaflympic、聴覚障害者を表す”deaf”と”Olympic”を合わせた造語で、デフの世界スポーツ大会である）をデフ自身が運営して、これは4年ごとに開催されている。

筆者は、13歳で原因不明の疾病により徐々に聴力が低下し、現在の残存聴力はわずかである。障害が進行する中、バレーボール選手としてプレーしていたが、バレーボール雑誌を通じて、聴覚障害者のバレーボール競技である、デフバレーボール（以下デフバレーと記載）の存在を知り、以降22年間に渡って、日本代表選手として、デフバレー協会の設立者の一人として、そしてプレーイングマネージャーや役員としてデフバレーと携わってきた。

デフバレーとは聴覚障害者によって行われるバレーボールのことで、競技は6人制バレーボールの競技公式ルールに従って行われ、勝敗の決め方、ボールの大きさや重さ、コート of 広さ、サーブ権の移動、得点の入り方など、国際大会ではFIVB、国内大会ではJVAの6人制バレーボール競技規則を適用する。しかし、ホイッスルや声などの音が選手に聞こえないことから、試合を円滑に進

めるために、主審と選手、選手同士、監督と選手間のコミュニケーションには様々な工夫がされている。例えば、主審はサーブを打つ選手とアイコンタクトが成立してから、大きな動きでサーブの合図をすることや、試合中にボールが高く上がった時、選手は自分がボールを受ける意思があることを「声を出して」他の選手に伝えることができないので、その意思表示のために、大きく手を振って合図をしたり、フロアを足踏みし振動で他選手に合図をしたりすることである。試合中のタイムアウト時に出される監督の声での指示は、手話に変換され選手に伝えられる。

聴覚障害を持つ筆者にとって、障害の進行に伴う不安の心が増大する日々に、このようなデフバレーの活動は障害に打ち勝つための大きな心の支えとなった。パラリンピックが支援を集めていく中で、デフスポーツの存在の希薄化と戦うため、デフバレーをとおして健聴者にその実態を発信し、デフへの理解を深め、健聴者との共存社会の実現に結び付けていく強い使命があると考えているに至った。

しかしながら、我が国では、他の障害者スポーツの影響力が強く、デフスポーツはマイナー競技から脱却できずに徐々に衰退している。

このような現状において、デフバレーを普及・発展させる意義を考えると、デフバレーはスポーツ経験や年齢、聴覚障害の程度を問わず聴覚障害者にとって注目となり、日常あるいは社会生活を送る上でパワーの根源や目標になるはずである。つまり、障害の特性から埋没してしまいがちなデフのアイデンティティを示し、社会と共生していくデフバレー競技の普及やデフバレーのスター選手の誕生によって、心のよりどころができるということではないだろうか。デフバレーを発展させることはデフバレーのみにとっての利益ではなく、障害への対峙に悩むデフや取り巻く家族や関係者をはじめ、その他の障害の人たちにとって大きく貢献できることとなるだろう。

## 第二節 研究目的

前述した通り、筆者は長年デフバレーに対して当事者として携わってきた。その中で、近年のデフスポーツ全体の衰退傾向に問題意識を持つに至った。そこで、わが国のデフバレーが抱える問題点を明らかにするとともに、デフバレーのさらなる普及・発展のための施策を提言することを本研究の目的とする。

## 第二章 研究手法

### 第一節 我が国のデフバレーを取り巻く構造の分析

本研究では、まず、我が国のデフバレーを取り巻く構造を把握するために、平田・中村（2006）が提唱するスポーツビジネスの成功要因を計るトリプルミッションモデルに基づき、我が国のデフバレーを「代表チームの強化(勝利)」、「競技団体の財務状況（市場）」、「競技人口と競技の認知度（普及）」の3分野から問題点を抽出し、要素ごとに分析する。

平田、中村（2006）は、プロスポーツ界においてある特定の競技やプロスポーツクラブが持続的な発展をしていくためには、競技力向上を図っての「勝利」の増加、収益最大化のための「市場」の拡大、競技の裾野を広げる「普及」活動という3点の要素がそれぞれに拡大しつつ、互いに好影響を与え合うという循環が必要不可欠であるとしている。そして、これを「トリプルミッション」と名付け、スポーツビジネスにおける成功要因としている。

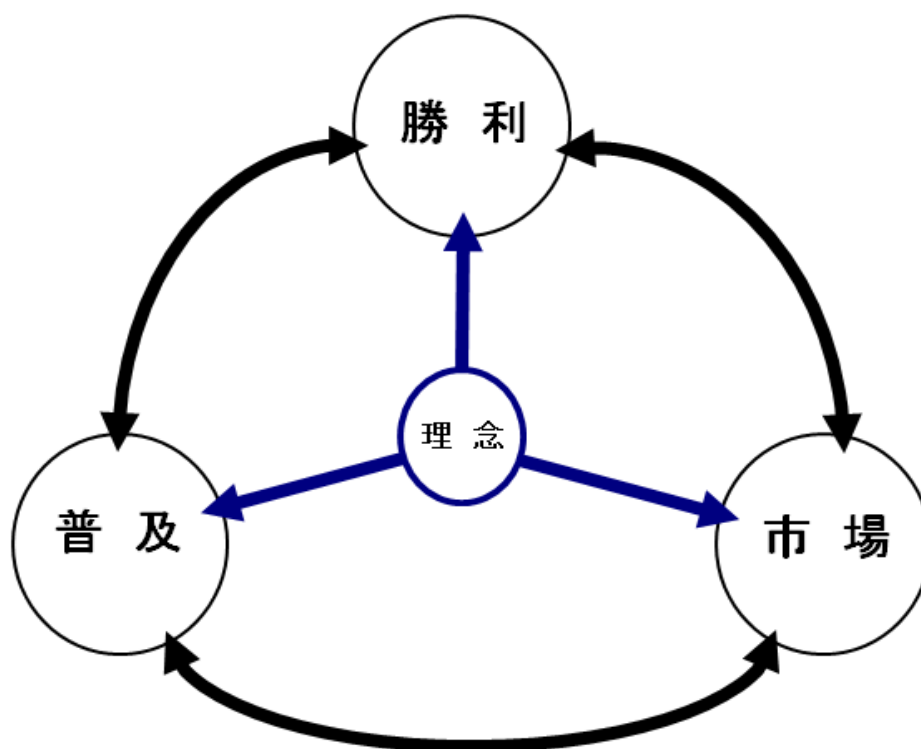


図 1 トリプルミッションモデル（平田・中村 2006）

また、これら3つの各要素を拡大させる原動力となり、互いを密接に結びつけスムーズに好循環に導くために最も必要なものが、組織がそれぞれに持つ

「理念」であると説いている。

本研究では、このトリプルミッションモデルの「勝利」にデフバレー代表チームの成績を、「市場」にデフバレー協会の財務状況を、そして「普及」には競技人口と競技の認知度を当てはめて分析を行う。

## 第二節 障害者スポーツ他種目（車椅子バスケットボール）との比較

次に、同様の分析を用いて、国内で振興策が成功している他競技種目である日本車椅子バスケットボール連盟（以下、車椅子バスケ連盟）との比較を行う。車椅子バスケットボール競技を比較対象とした理由は、

- 1) 同じ障害者の団体スポーツである、
- 2) 同じ国内大会の運営から国際大会へのチーム派遣や代表チームの強化策を講じている、
- 3) パラリンピックの競技種目であり単独競技で世界選手権が開催されている、
- 4) 漫画「リアル」に競技種目が取り上げられ認知度が高く、確立した財政基盤を有していることからトリプルミッションモデルにおける好循環が見受けられる、ためである。

## 第三節 ドイツデフバレー代表関係者へのインタビュー調査

最後に、デフスポーツに対する認知度が高く、強化策が成功しているドイツデフバレーチームの関係者に対して、インタビュー調査を行う。前述した車椅子バスケットボールとの比較により、わが国のデフバレーに内包する問題点を国内的な観点から検証できるが、肢体障害と聴覚障害では、身体的な障害と感覚障害との違いがあり、参考にできない部分がある。そこで、同種の聴覚障害をもつ他国との振興・強化策の比較を行い、成功要因を明らかにして、わが国のデフバレー振興策の検証を行う。ドイツチームを選ぶ理由は、

- 1) 「デフリンピック」の認知度が高いこと、
- 2) 世界のベスト8の常連であること、
- 3) 先進国であり経済的な格差や福祉への理解に大きな格差がない、ためである。

### 第三章 研究結果

#### 第一節 我が国のデフバレーを取り巻く構造の分析結果

##### 第一項 我が国におけるデフバレー組織体制

デフバレーを取り巻く構造を把握するために、最初に我が国におけるデフスポーツの組織体制を以下に記述する。

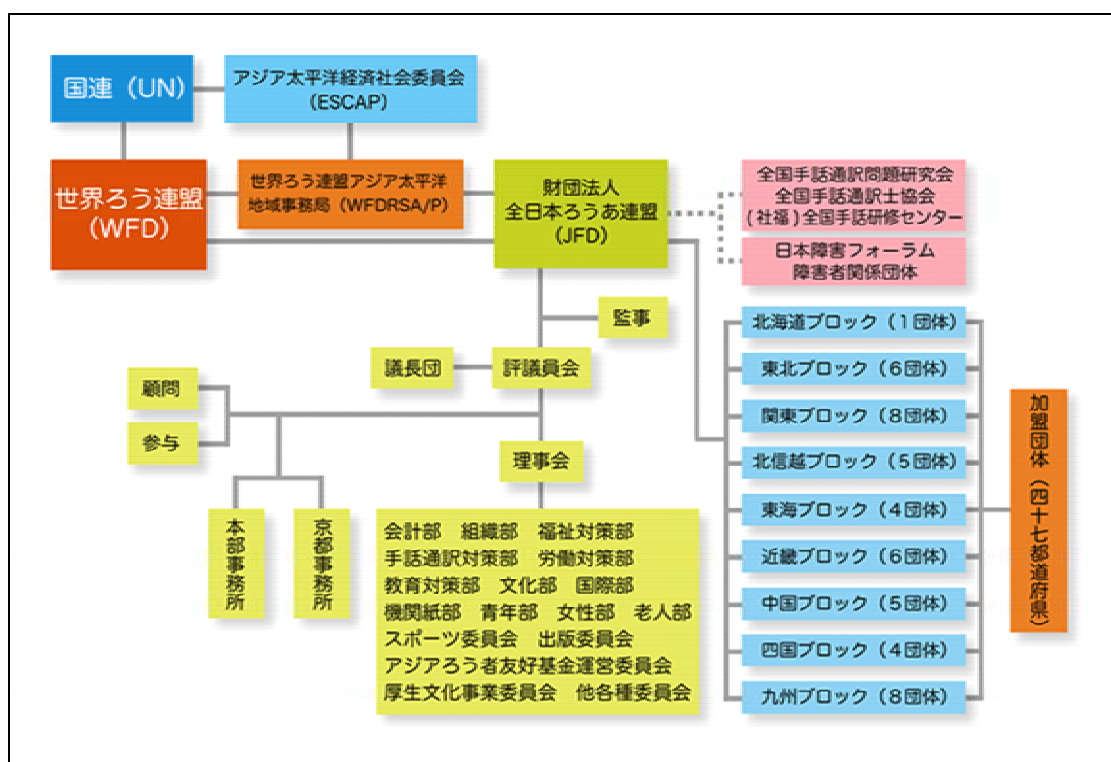


図 2 財団法人全日本ろうあ連盟組織図

図 2 は、財団法人全日本ろうあ連盟組織図である。全国 47 都道府県に傘下団体を擁する聴覚障害者団体を統括するデフの当事者団体で、デフの人権を尊重し文化水準の向上を図り、その福祉を増進する目的で活動している組織である。全日本ろうあ連盟は内部に「全日本ろうあ連盟スポーツ委員会」(以下 JDF・SC) を設け、JDF・SC が主体となって我が国のデフスポーツを統括し、国際・国内事業の窓口を担っている。なお、一連のデフスポーツに関する事務は全日本ろうあ連盟職員が兼務で行っている。

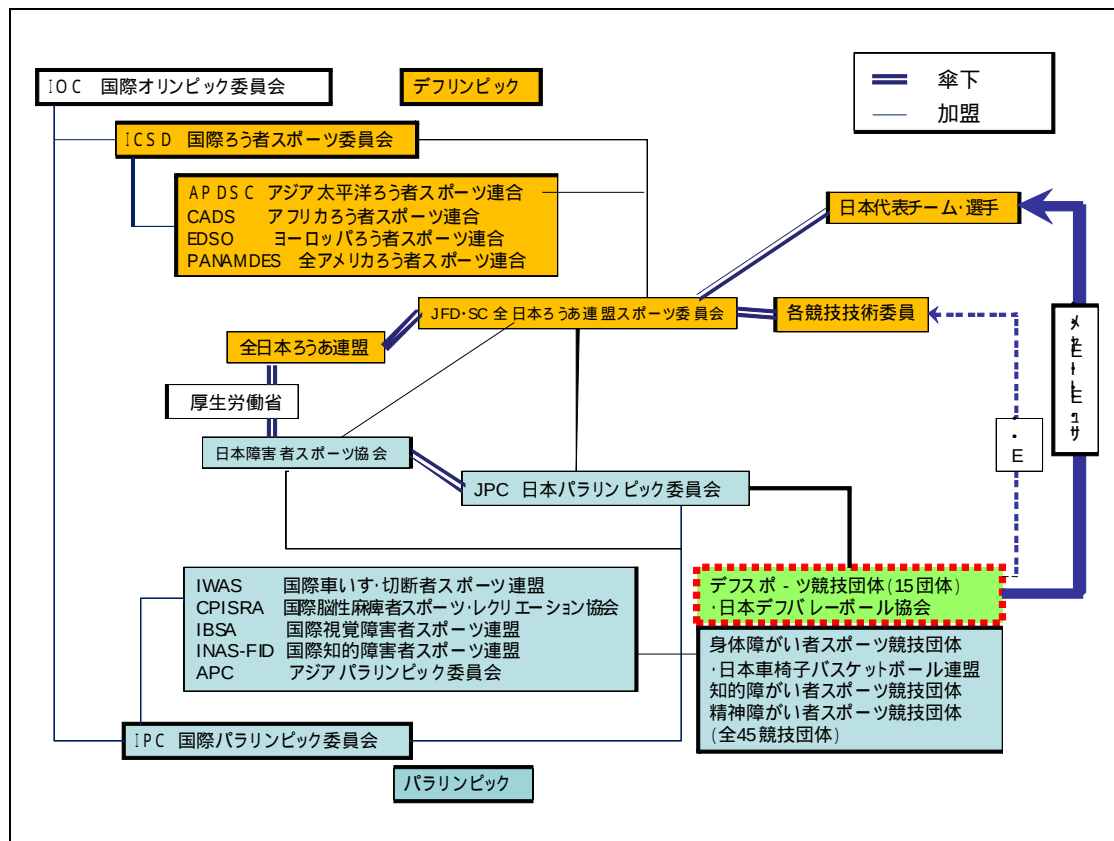


図 3 デフスポーツを取り巻く組織図

図 3 は、デフスポーツの相関図である。JDF・SC は、国際ろう者スポーツ委員会、アジアろう者スポーツ連盟に加盟している。一方国内では、我が国の障害者スポーツを統括する日本障害者スポーツ協会に加盟し、全日本ろうあ連盟の会員に対するスポーツ事業を所管しているが、デフスポーツ競技別団体（以下デフスポーツ団体）を下部組織に含んでいない。デフスポーツ団体は、全日本ろうあ連盟の会員でなくてもスポーツを楽しみたい人が加入している。そのため、組織的には、日本の障害者競技別スポーツを統括する日本パラリンピック委員会（以下 JPC）に加盟している。

JDF・SC は、全日本ろうあ連盟会員へのサービスを前提として成り立っているため、デフリンピックや世界選手権に派遣する代表選手に対して、少なくとも 2 年以上の会費（年額約 2 万円）を納めることを派遣の条件としている。

また、聾学校体育は全国聾学校体育連盟が所管しているが、全日本ろうあ連盟は前述のとおり会員制の組織であるため、社会人スポーツと聾学校スポーツの接点は少なく、その交流や関係作りは、それぞれのデフスポーツ団体に任されている状況にある。すべてのデフスポーツ団体は、本業の傍ら、ボランティアで運営されている。

## 第二項 デフバレーにおけるトリプルミッションの「勝利」について

ここからは、我が国のデフバレーを、トリプルミッションモデルの「勝利」、「市場」、「普及」の 3 つの観点から分析していく。本節ではまず「勝利」について、デフバレー代表チームの成績の推移を分析する。

### デフバレー代表チームの成績推移

トリプルミッションモデルの「勝利」に関する分析として、デフバレー男女代表チームの過去の成績を分析した。男子デフバレーにおける、日本、ドイツ、ロシア、ウクライナ、アメリカ、イタリアの合計 6 カ国のデフリンピック成績推移を表した図が、図 4 である。

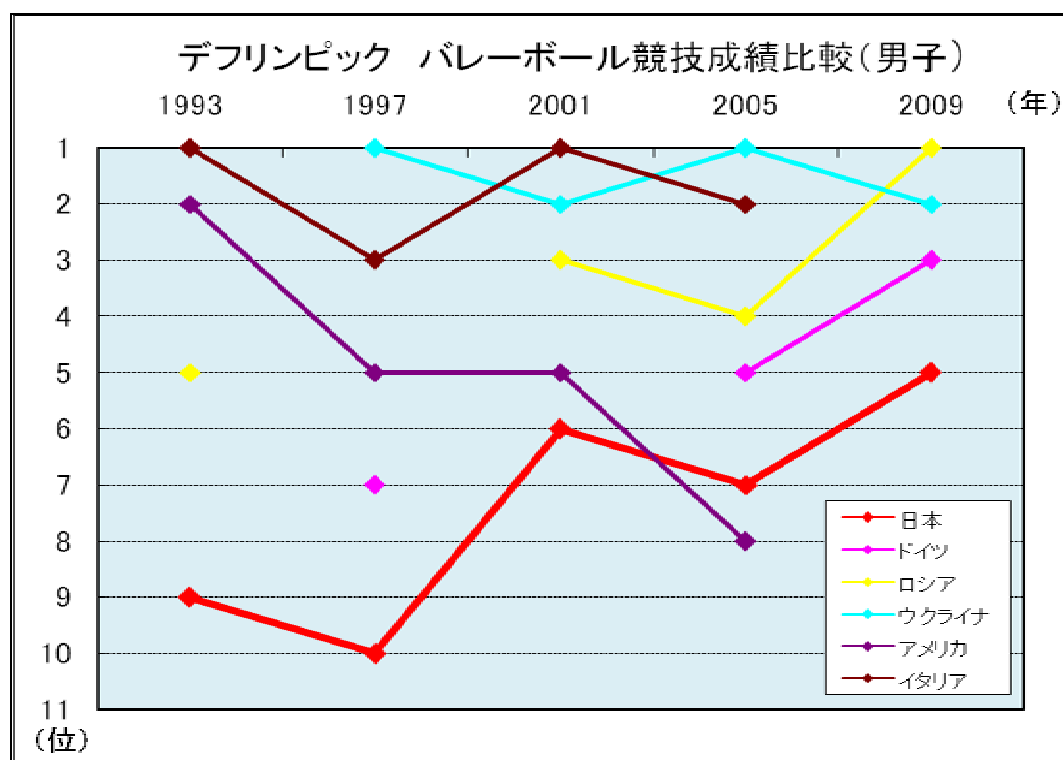


図 4 デフリンピックにおける男子バレーボール競技成績比較

次に、同じく日本、ドイツ、ロシア、ウクライナ、アメリカ、イタリアの合計 6 カ国の、女子デフバレー代表のデフリンピック成績推移を表した図が、図 5 である。

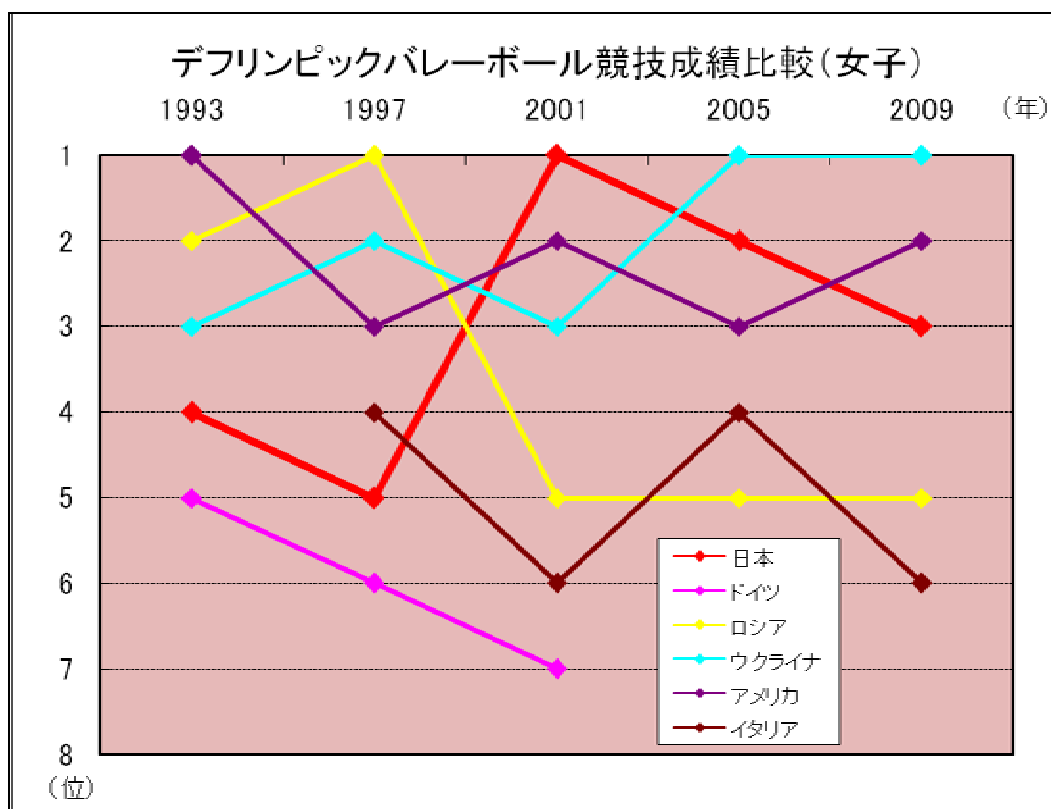


図 5 デフリンピックにおける女子バレーボール成績比較

男女それぞれの、デフリンピックの過去 5 大会における男女バレーボールの主要国の成績を比較した結果、日本は、男子デフバレーが 97 年大会までは低調な成績であったものの、2001 年大会からは 7 位以上の成績で推移していることが分かった。2009 年大会では 5 位と、過去最高の成績を収めている。女子デフバレーは、2001 年大会で金メダルを獲得し、2009 年大会では銅メダルであった。

近年の男女両方の成績向上から、1998 年にデフバレー協会を立ち上げ、強化委員会を主体として代表を強化した効果が表れていることがわかる。デフバレー協会設立以前は団体競技のデフスポーツ団体が存在せず、日本ろう者スポーツ委員会（全日本ろうあ連盟スポーツ委員会の前身）が、バレー代表チームの監督を指名し、チームを強化する形をとっていた。デフバレー協会の設立以前は、代表チームのマネジメントをする役員がいなかったため、計画的なチーム強化のスケジューリング、安定的な予算確保、十分なスタッフの確保などが出来ていなかったのである。

また、2008 年 8 月にはアルゼンチンにて第一回デフバレー世界選手権が行われ、男子は銅メダル獲得、女子は銀メダル獲得と、好成績を挙げることが出来た。

以上の結果から、女子デフバレー代表チームは、デフリンピックで 3 大会連続しメダルを獲得しており、世界のトップチームとして持続的に好成績をあげているが、男子デフバレー代表チームは、デフリンピックでのメダル獲得は 1977 年アメリカ大会の 1 度だけであり、それ以降に 4 位以上の成績を収めておらず、まだ成績向上の余地があることがわかる。

他国の状況を見てみると、アメリカは、男女代表チームともに代表選手が聴覚障害者大学（ローチェスター工科大学、ギャロデット大学）バレーボールチームから選出されることが多い。アメリカは国土が広く、代表チームの強化を効率的に行うにあたり、選手の在住エリアを限定しているという。

ウクライナは、デフリンピックの成績に応じて国から選手へ報奨金が支給されている。金メダルでは 5 万 US ドルが支給されるという。そのため報奨金で生活しデフバレーボールを本職にしている選手がいる。トップアスリートの選手層が厚く、男女代表ともに毎回上位に入賞している。

ロシアの特徴としては、代表選手はデフリンピックの三ヵ月前から本職を公休することができ、強化に専念するための環境が整っているという。

イタリアは、男子代表の主力選手 4 名がセリエ B に所属し、1993 年から 2005 年までは、3 位以内にランクインしていた。しかし、新旧交代が進まず、選手が高齢化したためチームが組めず、2008 年世界選手権と 2009 年デフリンピックにエントリーしていない。

## デフバレー代表選手の構成

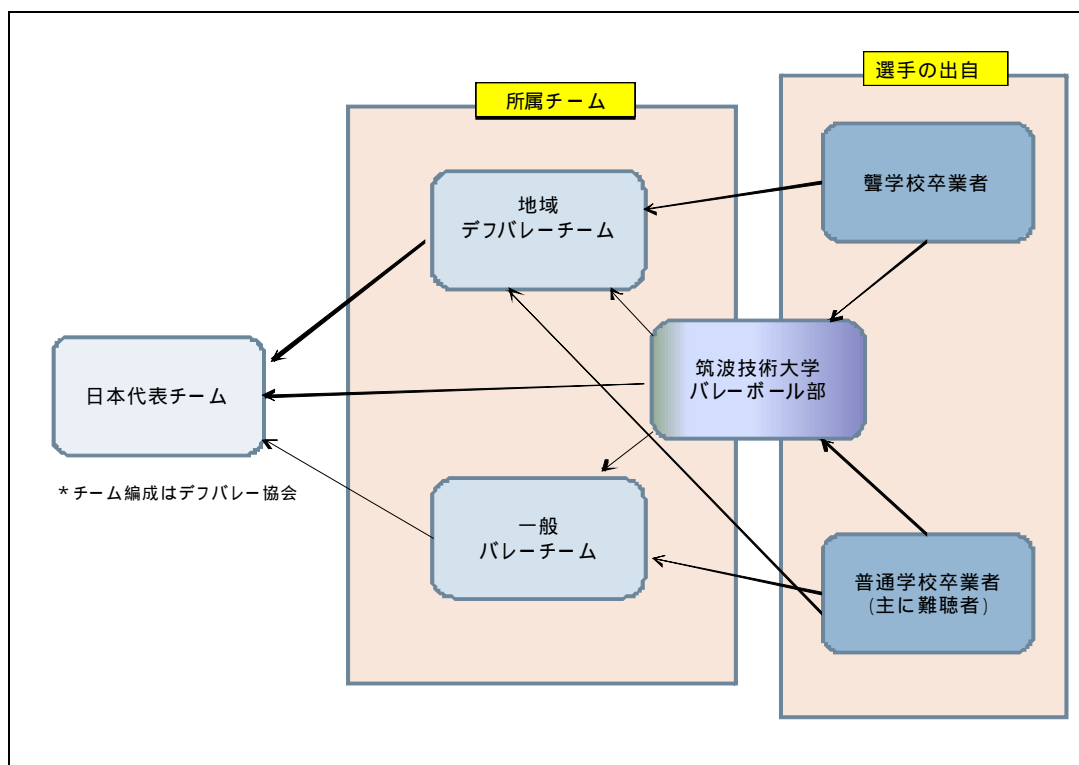


図 6 デフバレー代表の選手構成

図 6 は、日本代表男女バレーボールチームの選手構成である。代表チームは競技団体が編成する。選手構成は、まず、地域のデフバレーボールチームに所属する選手と、一般の企業やクラブチームに所属する選手に分けられる。次いで、選手の出自を聾学校卒業者（在校生）と普通学校卒業者（在校生）、日本で唯一の聴覚障害学生を募る筑波技術大学バレーボール部在籍者に分けることができる。

2009 年日本代表男女チームは、9 割の選手は地域のデフバレーチームに所属するが、女子には V チャレンジリーグ、男子には実業団地域リーグに所属する選手がいる。最近の傾向では、1990 年に日本で初めて聴覚障害者を対象とする筑波技術大学（現：筑波技術大学）が設立され、ろう学校卒業者、普通学校卒業者の両者が入学している。学内に体育会バレーボール部があり、部活動を経てデフリンピックやデフバレーを知り、代表チームに入る選手が増えていることである。

日本代表男子バレーボールチームの選手構成の特徴は、ろう者の選手は聾学校の男子バレーボール部が極めて少ないことから、ろう学校卒業後にデフバレー

ーチームや筑波技術大学に入ってバレーボールを始めた者が代表選手に選ばれていることである。普通学校を卒業した難聴者は、インターハイ出場者や大学の体育会バレーボール部に所属してレギュラーであったものが多い。

日本代表女子バレーチームの選手構成の特徴は、聾学校卒業生が多いことである。これは聾学校の女子バレーボール部数が多いため選手同士が競争する環境がある程度整っているためである。

男子チームの近年の成績向上の裏には、普通学校に通っていた難聴者がチームに加わったという背景がある。しかし、難聴者が増えたのは偶然のスカウトなど、たまたまの要因にすぎない。他国を見ても、出場資格をぎりぎりクリアしている難聴者が多く、日本チームのさらなるレベルアップを求めるためには、普通学校を卒業した難聴者の取り込みが重要であることが伺える。

### 第三項 デフバレーにおけるトリプルミッションの「市場」について

本項では、トリプルミッションモデルの「市場」に、日本デフバレー協会の収支構造を当てはめて分析した。

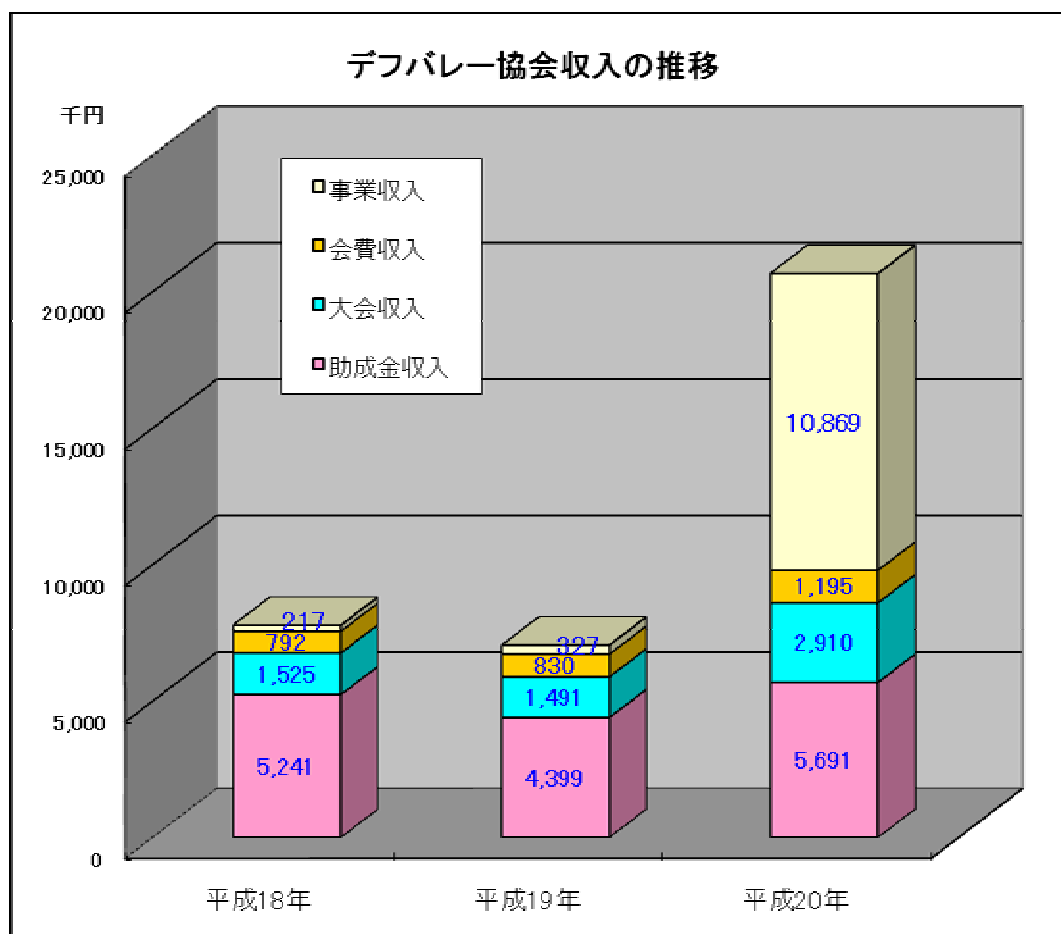


図 7 デフバレー協会収入額の推移

図 7 は、平成 18 年から平成 20 年までのデフバレー協会収入推移である。「助成金収入」とは、JPC からの強化補助金等であり、「大会収入」とは、デフバレーの大会において、参加者のエントリーフィー等、大会を開催する際に発生する収入である。また、「事業収入」とは、グッズの販売やスポンサー収入など、デフバレー協会独自の努力で発生する収入であり、「会費収入」とは、デフバレー協会に加盟するための年会費である。この図から、「助成金収入」と、「会費収入」は、3 年間ほぼ横ばいで推移しているのに対して、平成 18 年、19 年は 120 万円前後であった「事業収入」が平成 20 年度には、1000 万円にまで増加

し、「大会収入」は 150 万円前後から 290 万円で約 2 倍に増加していることがわかる。

表 1 平成 20 年日本デフバレー協会決算内訳

平成20年1月1日～平成20年12月31日

収入

(単位:円)

| 科 目       | 金 額        | 内 訳                                                                 |
|-----------|------------|---------------------------------------------------------------------|
| 繰越金       | 357,474    | 平成19年より                                                             |
| 協力謝金      | 10,000     |                                                                     |
| 会費(平成20年) | 1,194,500  |                                                                     |
| 大会収入      | 2,910,438  | デフカップ 船橋大会 1,743,938円<br>デフビーチバレーカップ 1,166,500円                     |
| JPC補助金    | 5,691,000  | 国内強化 男子 901,000円 女子 1,303,000円<br>世界選手権 男子 1,262,000円 女子 2,225,000円 |
| 事業収入      | 10,501,000 | 応援Tシャツ                                                              |
| 利息        | 672        | 口座利息                                                                |
| 計         | 20,665,084 |                                                                     |

支出

| 科 目      | 金 額        | 内 訳                                                                 |
|----------|------------|---------------------------------------------------------------------|
| 事業費      | 11,067,767 | Tシャツ制作費、強化費補助、派遣費補助                                                 |
| 登録費      | 200,000    | 男子・女子強化のJPC登録費(@100,000円×2)                                         |
| 事務諸経費    | 438,694    | 事務用品等                                                               |
| 手話通訳費    | 18,640     | 渉外接待(ビーチバレー、SIDE-B)                                                 |
| 謝金       | 80,000     |                                                                     |
| 大会支出     | 3,079,920  | デフカップ 船橋大会 1,743,938円<br>デフビーチバレーカップ 1,335,982円                     |
| JPC補助金支出 | 5,691,000  | 国内強化 男子 901,000円 女子 1,303,000円<br>世界選手権 男子 1,262,000円 女子 2,225,000円 |
| 繰越金      | 89,063     | 平成21年へ繰越                                                            |
| 計        | 20,665,084 |                                                                     |

表 1 は、平成 20 年のデフバレー協会決算をまとめた表である。図 6 から平成 20 年度は、協会独自の事業収入と大会収入が増加していることが明らかになったが、この表から、平成 20 年度は「デフバレー応援 T シャツ」の販売による事業収入増加が大きく貢献していることがわかる。「大会収入」は、デフカップ船橋大会と、デフビーチバレーカップの 2 つの大会からもたらされている。大会に参加するためには、デフバレー協会の会員になる必要があり、大会が魅力的であるほど、デフバレー協会会員が増えるということである。

次に、助成金収入の内訳について述べていく。平成 20 年度は、協会独自の収入である事業収入の拡大に成功したことで、全体の収入に占める助成金収入の割合が減少したが、それまでは助成金収入が全体の収入の中で最も高い割合を占めていた。助成金収入の金額は、日本パラリンピック委員会（以下 JPC と記載）による評価ランクによって決められる。表 2 は、平成 21 年度日本パラリンピック委員会加盟競技団体評価ランクの一覧である。加盟競技は聴覚障害、身体障害、知的障害の 3 つのカテゴリーに分かれ、全部で 61 競技存在するが、ここではそれぞれの代表的な競技をピックアップした。

表 2 平成 21 年度日本パラリンピック委員会加盟競技団体評価ランキング

平成21年度日本パラリンピック委員会  
加盟競技団体別評価ランク表

| 種別 | 競技名           | 競技実績                     |               |               |              |         |               |              |              |                  |                | JPC事業への参加状況      |                  |    | 評価<br>ポイント<br>合計 | 評価<br>ランク | 配分額<br>(万円) |
|----|---------------|--------------------------|---------------|---------------|--------------|---------|---------------|--------------|--------------|------------------|----------------|------------------|------------------|----|------------------|-----------|-------------|
|    |               | パラリンピック・デフリンピック<br>対象大会名 | 成績基礎データ       |               |              |         | 評価ポイント        |              |              |                  | 事業<br>実施<br>状況 | 実<br>施<br>状<br>況 | 評価<br>ポイント<br>小計 |    |                  |           |             |
|    |               |                          | A<br>最高<br>成績 | B<br>入賞<br>者数 | C<br>参加<br>数 | 入賞<br>率 | A<br>最高<br>成績 | B<br>入賞<br>率 | C<br>参加<br>数 | 評価<br>ポイント<br>小計 |                |                  |                  |    |                  |           |             |
| 聴  | バレーボール(女子)    | 2005 メルボルンデフリンピック        | メダル           | 団体            | 団体           | 100%    | 6             | 4            | 6            | 60               | 10             | 10               | 20               | 80 | A                | 500       |             |
| 聴  | バレーボール(男子)    | 2005 メルボルンデフリンピック        | 入賞            | 団体            | 団体           | 100%    | 4             | 4            | 6            | 40               | 10             | 7                | 17               | 57 | B                | 300       |             |
| 聴  | ビーチバレーボール     |                          |               |               |              |         |               |              |              |                  |                |                  |                  | 0  | E                | 50        |             |
| 聴  | 陸上競技          | 2005 メルボルンデフリンピック        | メダル           | 3             | 4            | 75%     | 6             | 3            | 2            | 30               | 10             | 3                | 13               | 43 | C                | 200       |             |
| 聴  | 水泳            | 2005 メルボルンデフリンピック        | 金             | 3             | 3            | 100%    | 8             | 4            | 1            | 40               | 10             | 7                | 17               | 57 | B                | 300       |             |
| 聴  | 卓球            | 2005 メルボルンデフリンピック        | メダル           | 8             | 8            | 100%    | 6             | 4            | 2            | 36               | 10             | 7                | 17               | 53 | B                | 300       |             |
| 聴  | バスケットボール(女子)  | 2005 メルボルンデフリンピック        | 入賞            | 団体            | 団体           | 100%    | 4             | 4            | 6            | 40               | 10             | 0                | 10               | 50 | B                | 300       |             |
| 聴  | バスケットボール(男子)  | 2005 メルボルンデフリンピック        | 出場            | 団体            | 団体           | 0%      | 2             | 4            | 6            | 20               | 10             | 0                | 10               | 30 | D                | 100       |             |
| 聴  | サッカー(男子)      | 2005 メルボルンデフリンピック        | 出場            | 団体            | 団体           | 0%      | 3             | 0            | 6            | 18               | 10             | 7                | 17               | 35 | C                | 200       |             |
| 聴  | サッカー(女子)      |                          |               |               |              |         |               |              |              |                  | 7              | 7                | 14               | 14 | E                | 50        |             |
| 身  | 車椅子バスケットボール男子 | 2008 北京パラリンピック           | 入賞            | 団体            | 団体           | 100%    | 4             | 4            | 6            | 40               | 10             | 3                | 13               | 53 | B                | 450       |             |
| 身  | 車椅子バスケットボール女子 | 2008 北京パラリンピック           | ベスト4          | 団体            | 団体           | 100%    | 5             | 4            | 6            | 50               | 10             | 3                | 13               | 63 | A                | 750       |             |
| 身  | 水泳            | 2008 北京パラリンピック           | 金             | 18            | 18           | 100%    | 8             | 4            | 5            | 72               | 10             | 7                | 17               | 89 | 特A               | 1000      |             |
| 身  | 陸上競技          | 2008 北京パラリンピック           | 金             | 16            | 29           | 55%     | 8             | 2            | 6            | 64               | 10             | 7                | 17               | 81 | 特A               | 1000      |             |
| 知  | 陸上競技          | 2007 世界選手権大会(ブラジル)       | メダル           | 6             | 10           | 60%     | 4             | 3            | 2            | 20               | 3              | 10               | 13               | 33 | C                | 200       |             |
| 知  | サッカー          | 2006 世界選手権大会(ドイツ)        | 出場            | 0             | 団体           | 0%      | 1             | 0            | 4            | 4                | 10             | 10               | 20               | 24 | D                | 100       |             |
| 知  | 水泳            | 2007 世界選手権大会(ベルギー)       | 金             | 7             | 15           | 47%     | 5             | 2            | 3            | 25               | 7              | 10               | 17               | 42 | C                | 200       |             |

JPC に加盟している団体とは、国際競技大会が開かれ、国内における各競技統括団体として認められた団体である。これらの団体は毎年、加盟審査を通過する必要があり、通過した団体のみ補助金が支給される。各団体に支給される補助金は、パラリンピックやデフリンピックでのメダル獲得数やメダルの色によって決定される。表 2 は平成 21 年度日本パラリンピック委員会加盟競技団体評価ランク表であり、水泳や陸上競技は 2008 年北京パラリンピックで金メダルを獲得していることやメダル獲得数が多いため、最も高い特 A ランクであり、1000 万円の補助金支給が見込まれている。デフバレーに関しては、女子が、2005 年デフリンピック・メルボルン大会で銀メダルだったため、A ランクであり 500 万円の補助金が支給されており、男子は同大会で 7 位入賞だったため、B ランクの指定を受けて、女子より 200 万円低い 300 万円の補助金を受け取っている。

「JPC 事業への参加状況」とは、各競技団体の、強化合宿等の実施及び年度決算報告や強化合宿報告に関する事務処理能力や、補助金の使い方や内容への評価であり、決算報告等でミスが多く精度が低い団体は、減点されて補助金支給額が減る。満点は 20 点であり、デフバレーは女子が 20 点、男子 17 点の評価を受けている。この制度は平成 21 年度からスタートすることになった。なぜならば、以前から実績や決算報告がずさんな団体が多々見受けられているからである。平成 21 年度より、日本パラリンピック委員会と各競技団体が強化委託契約を結ぶことになった。

表 3 デフバレー協会の主要事業

## 日本デフバレーボール協会 主要事業

- ・ジャパンデフバレーボールカップ
- ・ジャパンデフビーチバレーボールカップ
- ・ろう学校デフバレー展示・バレー教室
- ・日本代表強化(男女6人制・ビーチバレー)
- ・グッズ販売

表 3 はデフバレーの主要事業をまとめたものである。表 1 の決算報告の部分でも述べたとおり、デフバレー協会は年間 2 つの大会を主催している。

ジャパンデフバレーボールカップとは、国内主要チームが参加する全国大会である。毎年 40 チームほどが参加する。

従来、デフバレーの国内主要大会は国体と全国ろうあ者体育大会の 2 つであった。しかし、国体は参加のために要求される実力のハードルが厳しく、全国ろうあ者体育大会は、ろうあ連盟に参加費を収めたチームのみ参加できる大会であったため、資金面でのハードルが高かった。

従来はこの 2 つの大会だけだったが、1999 年にデフバレー協会主催で、資金面や実力面でのハードルを低く設定した大会を設立した。これがジャパンデフバレーボールカップである。この大会は徐々に参加者を増やし、第 5 回大会では、全国ろうあ者体育大会のデフバレー部門への参加者を超えた。現在は、国体や全国ろうあ者体育大会を主催するメンバーが参考にしようと視察に来るほどである。

ジャパンデフビーチバレーボールカップは、2008 年に第一回大会が行われた、設立されたばかりの大会である。近年健聴者のビーチバレー人気向上があり、デフの選手たちもビーチバレーの大会に出たいという意識を強く持っていた。

しかし、健聴者の大会に出場するには、大会で説明を受けることや、エントリー上のコミュニケーションで障害が多く、参加を尻込みする選手が多かったため、自分たちでビーチバレーの大会を主催することにした。ビーチバレーの代表をデフリンピックに派遣するためには、国内大会を開かなければならないという基準があり、この基準を満たすためには絶好に機会だととらえて、大会設立へとつなげた。

表 4 デフバレー主要大会の比較表

| 大会名称                             | 開始年   | 主催者            | 参加資格                                      | * 出場<br>チーム数 |
|----------------------------------|-------|----------------|-------------------------------------------|--------------|
| 全国ろうあ者体育大会<br>バレーボール競技           | 昭和43年 | (財)全日本ろうあ連盟    | 全日本ろうあ連盟会員<br>(年会費/約2万円(傘下地域協会<br>会費を含む)) | 22           |
| 全国障害者スポーツ大会<br>聴覚障害者バレーボール<br>競技 | 昭和57年 | (財)日本障害者スポーツ協会 | 身体障害者手帳(聴覚障害)保持者                          | 12           |
| ジャパンデフバレーボール<br>カップ              | 平成10年 | 日本デフバレーボール協会   | 日本デフバレーボール協会会員<br>(年会費3,500円)             | 30           |

\* 出場チーム数は平成20年度大会のデータ

表4はデフバレー協会の主要事業である大会の開催について、主催者別に分析したものである。これをみると、全国ろうあ者体育大会バレーボール競技、全国障害者スポーツ大会聴覚障害者バレーボール競技、ジャパンデフバレーボールカップの三つで、主催者が異なり、それぞれ財団法人全日本ろうあ連盟、財団法人日本障害者スポーツ協会、そして日本デフバレーボール協会である。

聾学校デフバレー展示・バレー教室とは、普及のための取り組みであり、基本的にボランティアで行っている。

日本代表強化事業とは、選手のスカウトから、強化合宿、大会派遣など、一連の流れすべてをまかなっている。筆者は現在この強化事業の責任者を務めている。

グッズ販売は、デフバレー応援Tシャツを2種類12色で企画して、ホームページ上で販売を続けている。これは口コミが広まり、6000枚程度が販売された。グッズ販売は2008年の6月から事業を開始しており、売上はデフバレー世界選手権・アルゼンチン大会への代表派遣費用へと使われた。

#### 第四項 デフバレーにおけるトリプルミッションの「普及」について

次に、デフバレーにおける、トリプルミッションの「普及」に関して、現状ならびに変遷を分析した。

##### デフバレー選手数の推移

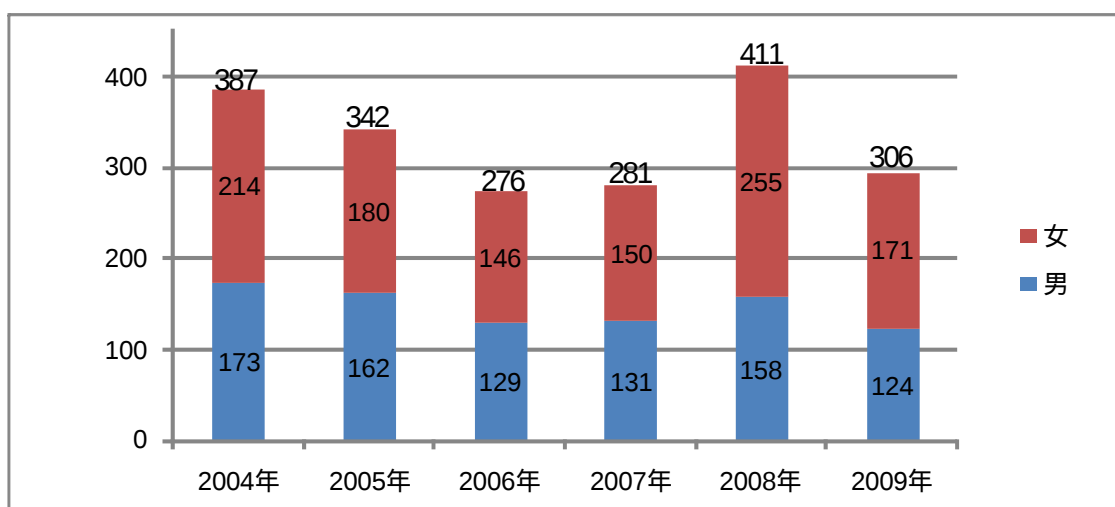


図 8 日本デフバレーボール協会会員数推移

図 8 は日本デフバレーボール協会会員数の推移を表したものである。このデフバレー協会の会員は、聴覚障害のある社会人とうろう学校等学生を対象にしている。ジャパ недеフバレーボールカップの参加申し込みと同時に年会費を納め、デフバレー協会会員に登録される仕組みである。なお、聾学校バレーボール部は全国に多数あるが、ジャパ недеフバレーボールカップ参加した選手のみデータに含まれている。

会員数の推移をみると、2008 年が 414 名で最も多く、2006 年は 276 名で最も少なく、約 1.5 倍の差がある。2008 年以降はビーチバレー大会を新設したため、2008 年は 18 名、2009 年は 12 名の会員増となった。

表 5 ジャパンデフパレーボールカップ開催地

|     | 2004年          | 2005年         | 2006年      | 2007年      | 2008年      | 2009年          |
|-----|----------------|---------------|------------|------------|------------|----------------|
| 開催地 | 大阪府<br>泉佐野市    | 愛知県<br>小牧市    | 静岡県<br>藤枝市 | 静岡県<br>浜松市 | 千葉県<br>船橋市 | 広島県<br>広島市     |
| 会 場 | 泉佐野市総合<br>体育館外 | 小牧パーク<br>アリーナ | 静岡武道館外     | 浜松<br>アリーナ | 船橋<br>アリーナ | 広島グリー<br>ンアリーナ |

表 5 はジャパンデフパレーボールカップの開催地である。会員登録のベースとなるジャパンデフパレーボール大会開催地である。図 8 の会員数推移と関連づけると、大阪と東京圏でジャパンデフパレーボールカップが開催された 2004 年と 2008 年は 400 名ほどの会員を集めた。2005 年の愛知大会では 342 名、地方都市の開催では 300 名を下回った。更に男女別にみると、聾学校等男子パレーボール部がある大阪府、愛知県、茨城県の近県で大会を開催すると、男子に増加がみられた。女子では、2008 年の船橋大会が 245 名で最も多くの参加があり、次いで、2004 年の大阪大会が 214 名の参加があった。東京圏や大阪など大都市での大会開催は、女子の参加が多くなっている。

## 聾学校数と聾学校の生徒数の推移

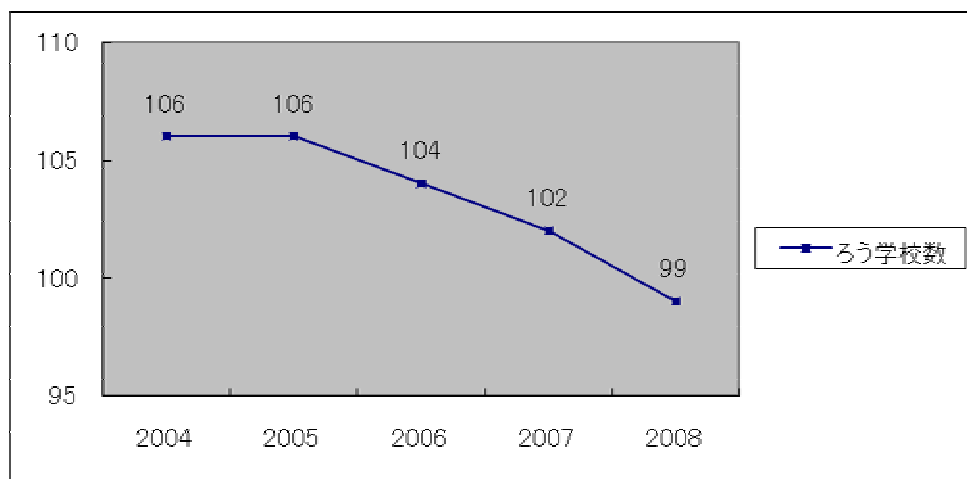


図 9 聾学校数の推移

図 9 は日本の聾学校の数の推移である。これをみると、2005 年をピークに年々減少していることが分かる。

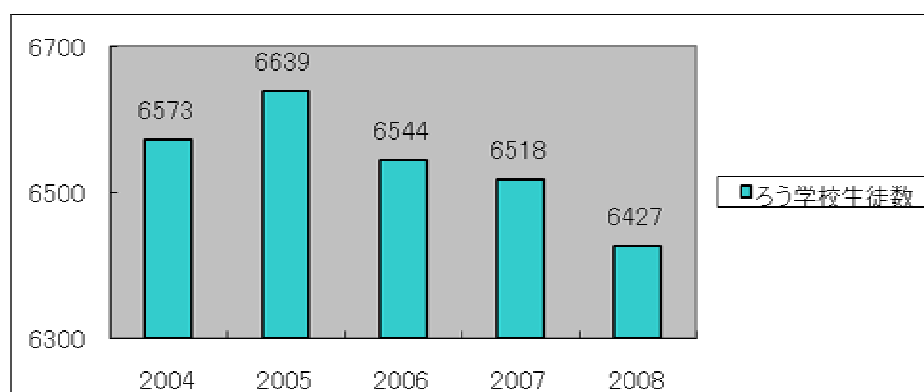


図 10 聾学校の生徒数の推移

図 10 は聾学校の生徒数の推移である。これも聾学校数と同様、2005 年をピークに減少している。

このように、デフバレー選手の母体となる聾学校の生徒数が減少している状況では、デフバレーの普及は難しいということが現状である。これは付録に示した「デフバレーボールに関する調査」の結果からも如実に表れているだろう。

## 普通学校に通う難聴者

厚生労働省が平成 18 年度に実施した、全国の身体障害者（児）実態調査では、現在、聴覚・言語障害児は 17300 人いる。そこから 0~4 歳児の 3500 人、言語障害児の 1730 人（この数は総数の 10%で推計している。）を引いた 12070 人が日本にいる聴覚障害児ということになる。このうち 6544 人（2006 年）が聾学校に通っているので、結果として、5526 人が普通学校に通う聴覚障害児、いわゆる難聴者ということになる。

この 5500 人という数は、聾学校に通う生徒数に匹敵する。こうした普通学校に通う難聴者をデフバレーに取り込むことが、デフバレーの普及に大きな意味を持つであろう。

表 6 日本男子代表チームメンバー

| 日本男子代表チーム |         |     |     |
|-----------|---------|-----|-----|
| 年度        | 代表メンバー数 | ろう者 | 難聴者 |
| 1997      | 10      | 8   | 2   |
| 2001      | 12      | 9   | 3   |
| 2005      | 12      | 9   | 3   |
| 2009      | 12      | 6   | 6   |

表 6 はデフバレーの日本男子代表チームのメンバーについてまとめたものである。これをみると、1997 年度では代表チームメンバーのほとんどがデフであったが、2009 年度ではデフと難聴者は同数となっており、難聴者の数が伸びていることが分かる。

この日本代表についてであるが、デフリンピックスポーツの代表チーム選手は各競技団体から選出される。その競技団体の選手は、社会人聴覚障害者選手、聾学校選手、普通学校選手（難聴者）で構成されている。

## 聾学校の体育

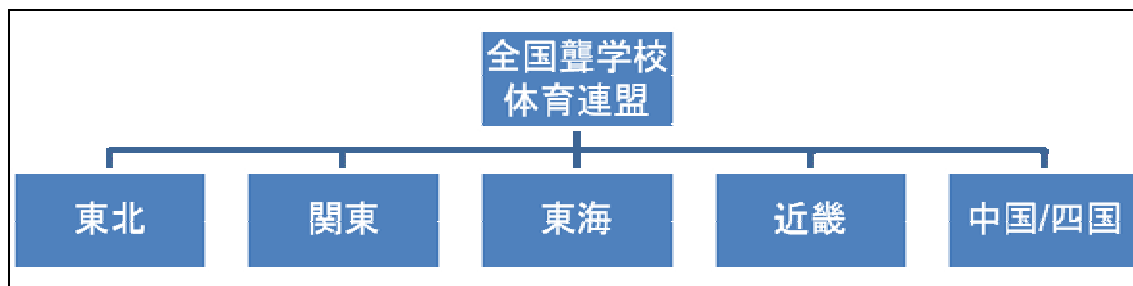


図 1 1 聾学校の体育教育組織図

図 11 は全国聾学校体育連盟の組織図である。聾学校体育教育の現状は、全国で加盟しているのは東北・関東・東海・近畿・中国 / 四国の 5 ブロックで約 80 校である。北海道と九州地区は未加盟である。このような組織の中で、全国大会を実施する競技は卓球と陸上である。予算・競技人口の関係で、バレーボール大会は地区ブロックのみで行われている。

## デフバレーチーム数

図 12 は、わが国のデフバレーチームの数である。

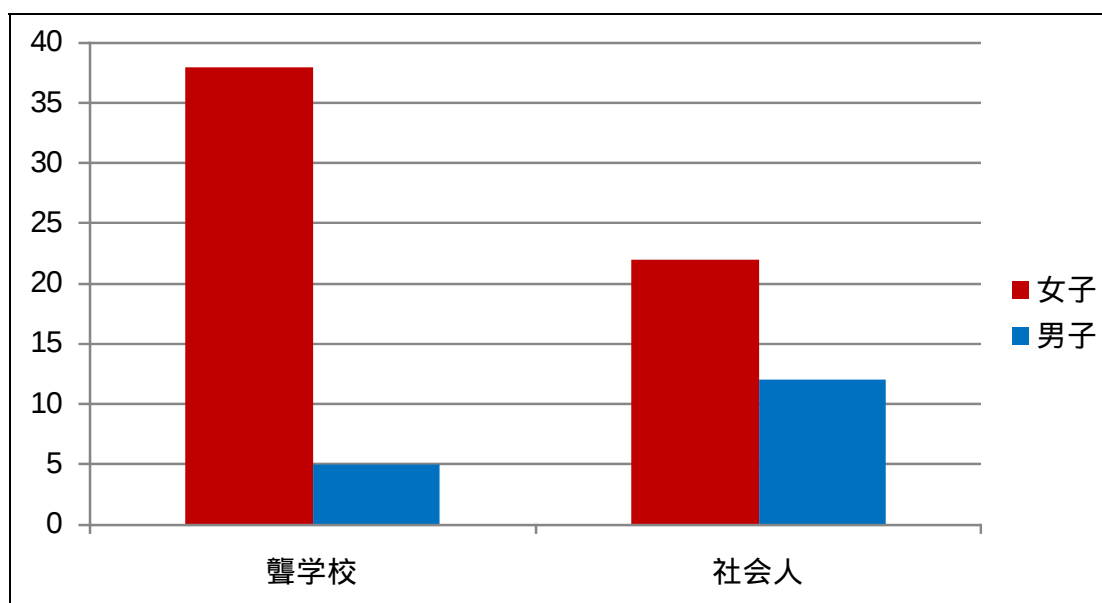


図 1 2 デフバレーチーム数

図 12 から分かる通り、聾学校の女子デフバレーチームが 38 チームあるのに対し、同じく聾学校の男子デフバレーチームは 5 チームしかない。また、社会

人デフバレーボールチームに関しても、女子が 22 チームあるのに対し、男子が 12 チームしかない。以上の事から、女子デフバレー代表チームの好成績の裏には、聾学校、社会人ともに多数存在する女子デフバレーチームの充実があり、今後男子デフバレー代表チームを強化するためには、男子デフバレーチームを増やすことが不可欠であることが伺える。

## 第二節 障害者スポーツ他種目（車椅子バスケットボール）との比較結果

前節と同様の分析を用いて、国内で振興策が成功している他競技種目である車椅子バスケットボール連盟との比較を行った。

表 7 日本デフバレーボール協会と日本車椅子バスケットボール連盟の組織比較

| 名称                  | 日本デフバレーボール協会                                                | 日本車椅子バスケットボール連盟                                                                           |
|---------------------|-------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設立/<br>会員数/         | 1998年9月<br>30チーム 293名                                       | 1975年5月<br>90チーム 808名                                                                     |
| 役員数/<br>専従職員/<br>人格 | 理事10名、監事1名<br>専従職員 なし<br>任意団体                               | 役員6名、監事2名、評議員10名<br>専従職員 1名（月125時間勤務）<br>任意団体                                             |
| 年会費/<br>決算額         | 3,500円<br>2,000円（高校生）<br>20,665千円（20年度）                     | 12,000円<br>6,000円（高校生）<br>54,548千円（18年度）                                                  |
| 主要事業                | ジャパンデフバレーボールカップ<br>ビーチバレーボールカップ<br>国際デフバレーボール大会参加<br>各種普及事業 | 日本車椅子バスケットボール選手権大会<br>全国障害者スポーツ大会車椅子バスケットボール競技予選会<br>機関紙発行<br>国際車椅子バスケットボール大会参加<br>各種普及事業 |

表 7 は、デフバレー協会と車椅子バスケットボール連盟と比較した。設立は、車椅子バスケットボール連盟が 1975 年で、デフバレーに 23 年遡る。登録チーム、選手数はデフバレーが 30 チーム 293 名（平成 21 年）であるに対し、車椅子バスケットボールは 90 チーム 808 名（平成 21 年度）で、約 2.7 倍の差が見られる。役員数はデフバレーが 10 名で、車椅子バスケットボールが 18 名であった。

デフバレーの業務は、役員が本業の傍らボランティアで行っているが、車椅子バスケットボールは月 125 時間勤務の専従職員を置いて業務を行っている。また、車椅子バスケットボールは事務所を所有している。組織の人格はどちらも任意団体であった。年会費はデフバレーが 3,500 円で、車椅子バスケットボールは 12,000 円である。デフバレーが年会費を低く設定する理由は、全日本ろうあ連盟の会費（年間約 2 万円）を払う選手がいるため、デフバレーを行ううえでの経済的な負担を軽くするためである。

主要事業は、どちらの事業もほぼ同じ内容であるが、車椅子バスケットボールは全国身体障害者スポーツ大会の地区予選会を受託している。

## 第一項 代表チーム成績の比較

表 8 デフバレー日本代表と車椅子バスケット日本代表の成績推移

| デフリンピック / デフバレー日本代表 |          |              |              | パラリンピック / 車椅子バスケット日本代表 |         |              |              |
|---------------------|----------|--------------|--------------|------------------------|---------|--------------|--------------|
| 開催年                 | 開催国      | 男子<br>順位/参加国 | 女子<br>順位/参加国 | 開催年                    | 開催国     | 男子<br>順位/参加国 | 女子<br>順位/参加国 |
| 1973                | スウェーデン   | -            | -            | 1964                   | 日本      | 予選落          | -            |
| 1977                | ルーマニア    | 4位/          | -            | 1976                   | カナダ     | 予選落/12       | -            |
| 1981                | 西ドイツ     | 7位/          | 5位/          | 1980                   | オランダ    | 8位/12        | -            |
| 1985                | アメリカ     | 2位/          | 3位/          | 1984                   | イギリス    | 予選落/14       | 3位/6         |
| 1989                | ニュージーランド | 5位/12        | 3位/6         | 1988                   | 韓国      | 7位/12        | 5位/9         |
| 1993                | ブルガリア    | 10位/16       | 4位/8         | 1992                   | スペイン    | 9位/12        | 7位/8         |
| 1997                | デンマーク    | 9位/12        | 5位/11        | 1996                   | アメリカ    | 8位/11        | 5位/7         |
| 2001                | イタリア     | 6位/12        | 1位/11        | 2000                   | オーストラリア | 9位/11        | 3位/8         |
| 2005                | オーストラリア  | 7位/11        | 2位/6         | 2004                   | ギリシャ    | 8位/12        | 5位/8         |
| 2009                | 台湾       | 5位/11        | 3位/7         | 2008                   | 中国      | 7位/12        | 4位/8         |

表 8 は、国際大会における車いすバスケットボールとデフバレー日本代表の成績を比較した表である。デフバレー男子の最高成績は 2 位で、車椅子バスケットボール男子は 7 位である。女子はデフバレーの最高成績は 1 位で、車椅子バスケットボール女子は 3 位である。

国際大会では、デフバレーが男女ともに上位の成績を納めていることがわかる。

## 第二項 連盟収入構造の比較

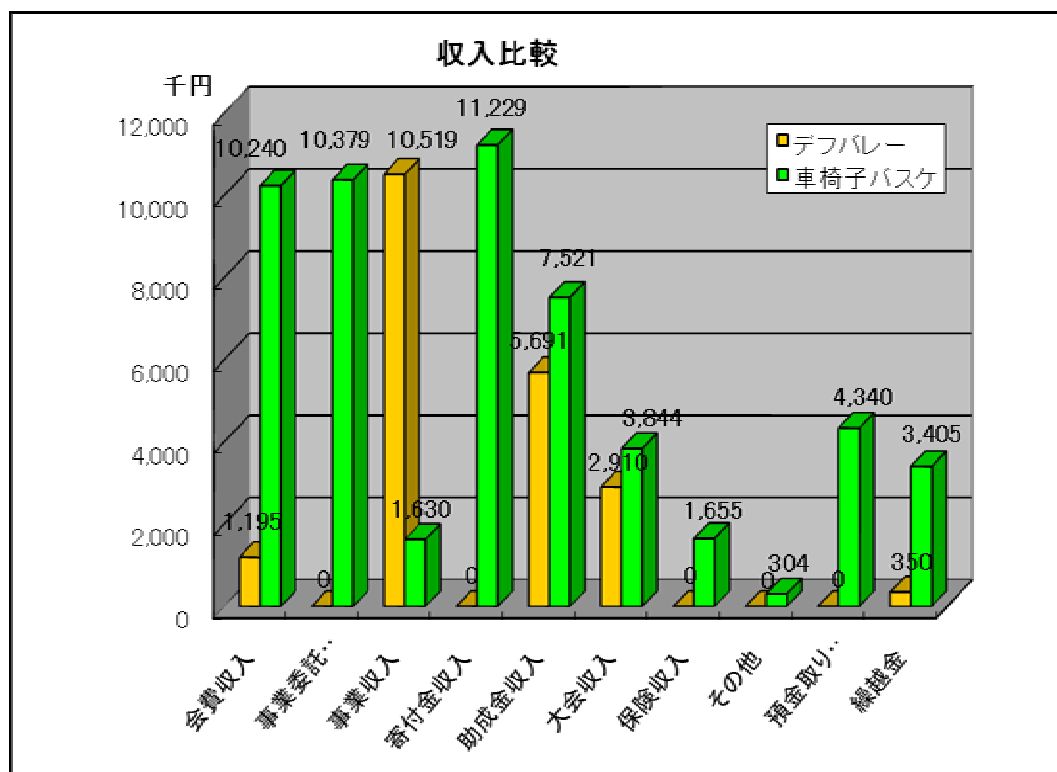


図 13 日本デフバレー協会と車椅子バスケットボール協会の収入比較

図 13 はデフバレー協会の平成 20 年決算と車いすバスケットボール協会の平成 18 年度決算との収入比較である。

会費収入とは日本デフバレー協会に所属する会員からの年会費による収入である。日本デフバレー協会の年会費は 3500 円、高校生は 2000 円である。このグラフから、日本デフバレー協会の平成 18 年度の会費収入は 1195 千円である。一方、日本車椅子バスケットボール連盟では年会費 12000 円、高校生は 6000 円である。よって、このグラフから日本車椅子バスケットボール連盟の会費収入は 10240 千円である。日本デフバレー協会と日本車椅子バスケットボール連盟の会費収入は 10 倍ほどで、年会費と会員数の差は顕著に現れている。

事業委託収入とは、JPC からの予選会の開催委託費である。車椅子バスケット連盟をみると、JPC から全国障害者スポーツ大会車椅子バスケットボール予選会の開催を委託され 10379 千円の収入を得ている。一方、デフバレー協会においても全国障害者スポーツ大会地区予選会があるが、現在は JFD・SC が担っている。よって、デフバレー協会への事業委託収入は 0 という現状である。

事業収入とは、各種事業からの収入である。デフバレー協会の事業収入では、ジャパンデフバレーボールカップ、ビーチバレーカップ、国際デフバレーボー

ル大会への参加、その他の普及事業があり 10519 千円の収入がある。一方、車椅子バスケットボール選手権大会、全国障害者スポーツ大会車椅子バスケットボール競技予選会、機関紙発行、国際車いすバスケットボール大会参加、その他普及事業があり、1630 千円の収入がある。

寄付金収入は、各企業や団体、個人からの寄付による収入である。デフバレー協会の寄付収入が 0 であるのに対して、車椅子バスケットボール連盟は 11229 千円の寄付金収入がある。

このような収入内訳をみると、デフバレー協会は事業収入が圧倒的に多いにもかかわらず、会費収入・事業委託収入・寄付金収入において車椅子バスケットボール連盟と圧倒的な差をつけられている。

### 第三項 車椅子バスケットボール普及について

特別支援学校→パラリピアンアスリートの訪問、地域障害者スポーツセンターでの講習会開催、漫画での普及、→選手層の拡大→強化プログラムの実施→各種大会の実施→ナショナルチーム強化

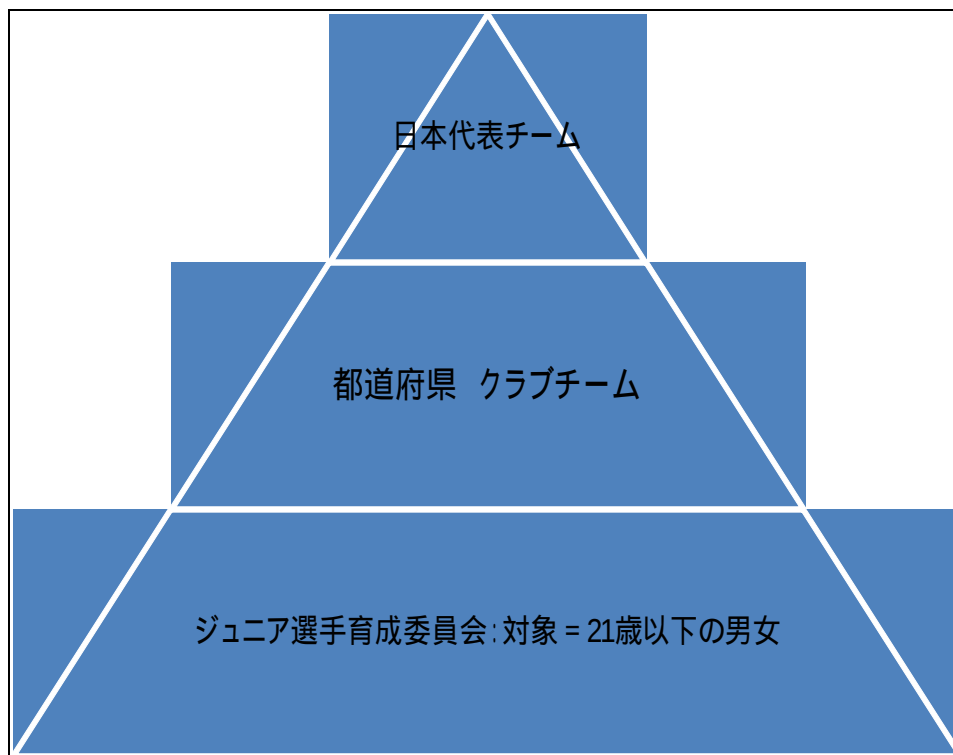


図 1 4 車椅子バスケットボールの選手層

車椅子バスケットボール連盟による各種大会・合宿の開催など普及施策は以下のとおりである。

- ・ジュニアの部

→全国ジュニア選抜大会、ジュニア育成委員会強化合宿、ジュニア育成委員会地方講習会

- ・社会人の部

→日本選手権大会、全日本女子選手権大会、日本選抜選手権大会、ブロック選抜大会、秋季大会、シニア大会、DMS カップ（東日本）、3on3 大会（休止中）

また、連盟地区組織、各チームによる、障害者スポーツセンターや養護学校等での講習会開催やイベントの開催している。

さらに、プロ車椅子バスケットボール選手等による普及活動にも力を入れている。

る。

例えば、プロ車椅子バスケットプレーヤーの安直樹選手（イタリアリーグ所属）は、小学生などへ講演及び指導、NHK「ニュースウォッチ 9」や民間放送局各社の番組に出演し、精力的な広報活動を行っている。また、各新聞社の取材による広報活動や、ブログの公開をしている。

その他にも、元アメリカ一部リーグ デンバーナゲッツ所属の神保康弘選手など、多数の選手や協力者による普及・広報活動を展開している。

また、選手自身の活動ではなく、マンガや映画による普及・広報活動もある。井上雄彦原作『リアル』（集英社、1999 年より）や、事故で受賞顔の高校生が車椅子バスケのトッププレーヤーを目指す青春映画『ウイニング・パス』（主演：松山ケンイチ・堀北真希、ウイニング・パス製作委員会、2003 年）は車椅子バスケの魅力を日本中に伝えることに大きく貢献したと言えるだろう。

### 第三節 ドイツデフバレー代表関係者へのインタビュー調査

ドイツデフバレー代表関係者へのインタビュー調査の詳細は以下のようである。

期日：2009 年 9 月 10 日(木)

会場：国立台湾大学体育館

使用言語：国際手話

ドイツ男子チーム監督/ STEBEL Christian

ドイツ男子チーム TD/(テクニカルディレクター) BOEHNER Alexander

質問事項は以下のとおりである。

- 1 . ドイツナショナルチームの運営資金の出所。また十分な額が出ているのか
- 2 . ナショナルチームの運営方法。
- 3 . 普及の面で、どのようにデフバレーの普及をしているのか。
- 4 . デフリンピックの認知や職場、地域の理解は進んでいるか。

質問項目とそれに対する回答は以下のとおりである。

- 1 ドイツナショナルチームの、運営資金は十分な額が出ているのか

→運営資金については、DGS ( deutscher gehorlosen sportverband e.V、1888 年設立 ) の役員が国と調整している。選手が強化合宿や大会派遣に際しての自己負担はほとんどない。

- 2 ナショナルチームの運営方法

- 3 普及の面で、どのようにデフバレーの普及をしているのか

( 2 , 3 は同時回答であった。 )

→DGS がドイツの 18 州に支部を設け、21 の競技があり、3 つの年齢カテゴリーで大会が準備されている。

州別の大会やドイツ全国大会で、テクニカルを高め、優秀選手を候補選手として、ナショナルチームに取り込んでいる。ナショナルチームの選手は、大会の三カ月前から仕事を休むことができ、大会に向け集中的に強化している。

普及の面で、バレーボールの指導に、一般バレーボール団体 ( ドイツバレー協会 DVV ) が絡むシステムを設けており、健聴者の監督や役員を派遣されている。また、DGS は手話ができる監督や役員を育成し、選手へ手話通訳を介さず

に直接指導することや意思疎通を図れることが、効率的な合宿での技術指導や戦術等の理解となり、ナショナルチームの強化に繋がっている。

#### 4 デフリンピックの認知や職場、地域の理解は進んでいるか。

→（回答なし）

以上の内容でインタビューを行ったが、大会でドイツとは同一グループに属し、ライバルチームの日本バレーの TD（筆者）からの質問に対して、表向きの内容が準備されたように感じた。また、今回のインタビューは国際手話で行った。しかしこの国際手話はアバウトな視覚的な言語であり、コミュニケーションがうまくいかない場面もあったため、細部まで確認できない点があった。

また、質問事項 2, 3 の回答にあった DGS とは「ドイツ聴覚障害者スポーツ連盟」のドイツ語の略表示である。（英語表記: German Deaf Sports Federation）

このドイツチーム監督へのインタビューの細部を補足確認するため、1996 年 11 月から翌年 5 月までドイツドルトムント州の DGS にスポーツ留学した竹島晴美氏（卓球競技デフリンピック元日本代表）に取材した。竹島氏によると、ドイツでは地域型総合スポーツクラブが主流であり、DGS は一般のスポーツクラブと同様に扱われている。デフの幼少児から高齢者まで、20 競技のスポーツをプレーすることができる（1997 年当時の競技数）。DGS は、NOC（ナショナルオリンピック委員会）のメンバーであるため、国より DGS 事務所や職員の経費として年間約 2800 万円の補助があり、強化等では毎年補助があるという。（金額不明）デフリンピック開催年には DGS に対して約 1 億円の追加補助があるという。また、各競技のコーチは健聴者の競技団体を通してプロ指導者を雇用し、DGS が報酬を支払う。オリンピックにした出場コーチや選手がデフチームのコーチとなるケースもある。ただし結果が伴わないことや、コーチに障害理解がないなどの場合には DGS が解雇するという。

特に竹島氏が強調したドイツと日本のデフスポーツが大きく異なる点として、ドイツでは、デフの福祉団体とスポーツ団体は完全に分離して運営され、スポーツ団体の役員が手話通訳までも育てているという。また、デフがスポーツを楽しむことが日常生活の中で深く浸透しているという 2 点であった。

ISCD(国際ろう者スポーツ委員会) デフリンピックの主催団体

↓

**メンバー(大陸別スポーツ連合)**

EDSO (European Deaf Sport Organization ヨーロッパろう者スポーツ連合)

AADSC(全アメリカろう者スポーツ連合)

ADSA(アフリカろう者スポーツ連合)

APCSD(アジア太平洋ろう者スポーツ連合)

↓

#### **EDSO のメンバー(43 カ国加盟)**

DGS は、EDSO のメンバーで、ドイツ聴覚障害者スポーツの統括団体である。

DGS 内に 21 のデフスポーツ競技別に TD を置き、TD または競技団体を中心に各競技の振興にあたっている。

日本の DGS に当たる組織が、「全日本ろうあ連盟スポーツ委員会(JDS・CS)」である。ドイツと日本の大きな違いは、DGS は独立したデフスポーツ団体として、デフスポーツの振興を目的に運営されているが、JDS・SC は、福祉団体である「全日本ろうあ連盟」の内部組織であり、スポーツ組織が福祉団体により運営されている点である。(本章第一節第一項 我が国におけるデフバレー組織体制を参照)

## 第四章 考察

この考察では、第三章の結果をもとに、「勝利」「市場」「普及」のトリプルミッションについて考察する。

### 第一節 「勝利」

デフバレー代表成績推移をみると、男女ともに国際的に成績は向上していることが分かる。しかし、デフバレーの競技人口をみると、聾学校と社会人に分けて考える必要がある。まず、聾学校は女子チームが 46 チームあるのに対し、男子チームは 5 チームである。競技人口も 1 チーム 10 人として考えると、女子は約 460 人、男子は約 50 人となる。次に、社会人チームをみると、女子は 22 チーム・220 人であるのに対し、男子は 12 チーム・120 人である。また、日本デフバレー協会の会員数は 300 人前後である。

このように、男子と女子でチーム数・競技人口に差があるのは、聾学校における部活動の実態に原因があるだろう。聾学校では、主に卓球・陸上・野球・バレーボールが部活動として存在するが、その中でも卓球・陸上は全国大会もあり、チーム数・競技人口ともに多い。残りの野球とバレーでは、野球が圧倒的に男子に人気がある。一方、女子に人気があるのはバレーボールである。

聾学校における男子のデフバレーチーム数・競技人口が少ない原因はこのようなことにあると思われる。

聾学校の大会を考察すると、聾学校バレー大会は中学部・高等部のブロック地区大会（関東・東海・近畿）と県内に複数の聾学校がある場合は県大会を開催している。全国大会は実施していない。これは全国に聾学校のバレーボール部が存在していないためである。聾学校の小学生時は、スポーツに触れるのは体育の授業だけでクラブ活動は行われていない。普及に関して、まず、聾学校高等部の全国大会を開催し、次いで中学部の全国大会を開催し、大会を通して聾学校校長会やバレー部顧問との連携を深め、小学部に指導できる形を作りあげていくことを目標とする。

指導者の問題もある。デフバレーに健聴者の指導者を召致し、レベルの高い指導をすることが望ましいが、実際はデフバレー協会と日本バレーボール協会の間でそのような交流はない。現在の男子代表チームの指導者は V チャレンジリーグ所属しているが、就任にあたってはデフバレー協会役員の個人的な交渉努力によっている。日本バレーボール協会と組織的なつながりを持つことで、更なる強化・普及を見込むことができる。

また、日本では、1 年間に 3～6 回（延べ 9～18 日間）の代表強化合宿を行う。

営に資金の都合上、合宿の回数は少なく、かつ短期間であり、指導者が手話に触れ、手話を覚える機会とはならない。手話講習会の開催や、選手に会って手話に触れる機会を設けるなどの工夫が必要となるだろう。

| 平均聴力レベル | 難聴の程度 | 身体障害者手帳等級基準 |                   |                       |
|---------|-------|-------------|-------------------|-----------------------|
| 25dB以下  | 正常    | 6級          | 両耳の平均聴力レベルが70dB以上 | 一側耳が90dB以上、他側耳が50dB以上 |
| 26dB以上  | 軽度    |             |                   |                       |
| 40dB以上  | 中等度   | 4級          | 両耳の平均聴力レベルが80dB以上 | 最良語音明瞭度50%以下          |
| 55dB以上  |       |             |                   |                       |
| 70dB以上  | 高度    | 3級          | 両耳の平均聴力レベルが90dB以上 |                       |
| 90dB以上  | 重度    |             |                   |                       |

(デフリンピック出場基準 両耳55デシベル以上の聴力損失)

図 15 デフリンピック出場基準

図 14 はデフと難聴者の違いである。

聴力の程度を表すために、このような聴力レベルという数字が用いられる。その人の聞こえを、その人が聞き取れる一番小さな音の大きさの数字、デシベルで表す。音には、高い音、低い音があるが、音の高さによっても、この聴力の数字は変わるので、平均聴力レベルという 1 つの数字で表し、数字が大きいほど、難聴の程度は重くなる。

軽度難聴者でも、相手の声が小さい、距離が離れているときなど、ときどき聞き取りにくくなる。

中等度になると多くの方が聞こえにくくて会話の不全感を感じるようになり、中等度以上の難聴者は全国に630万人、全人口の5%程度になるといわれている。

高度難聴になると普通の声の大きさの音が聞こえなくなるので、必ず補聴器がなければ会話が困難になるが、日本では身体障害者手帳の 6 級に該当する基準の 1 つは、両耳がこの高度難聴になった場合である。

難聴の程度が重くなればなるほど、補聴器での音声ことばの聴取は困難となり、視覚的手段でのコミュニケーションが中心になる。

全国で聴覚障害の身体障害者手帳を持っている人は、約 30 万人程度である。

ここで注目すべきは中等度で 55dB 以上の聴力損失の層である。この層は身体障害者手帳等級基準を満たさないが、デフリンピックへの出場権を有している。障害者手帳を持たないため自分がデフリンピックに出場できるという自覚がない難聴者が多数いると思われる。また、自分はデフバレーやデフリンピックというものに偏見を持っている場合もあり、難聴のバレー経験者でも参加しない選手がいる。そのような人たちには、デフバレーの魅力やレベルの高さを実際に観て知ってもらう必要がある。

このように、デフリンピックには出場できるが、障害者手帳を持たない中等度 55dB 以上の聴力損失の層をいかにデフバレーに取り込んでいくかが、今後のデフバレーの競技力強化には必要であると考ええる。

デフバレーの代表選手強化のためには、本来は、出場資格があるものの普通学校へ通うため、デフバレーを認知しておらず、デフバレー代表に選ばれない選手が多数いる。このような人材をデフバレーに取り込むことが、日本のデフバレー強化のために必要であると思われる。

男子チームは、難聴者が増えるにしがたが強い強くなっていることも事実である。しかし、難聴者が増えたのは偶然のスカウトなど、たまたまの要因にすぎない。難聴者を探す手法を工夫することが重要であり、そのためにはデフバレーを日本で認知させることが重要となってくるだろう。

## 第二節 「市場」

デフバレー協会の収入構造を考察すると、そのほとんどを助成金収入に依存している。これは厚生労働省の日本パラリンピック委員会からの助成金であり、現状では補助額の増減により事業が左右されてしまう。すなわち景気や社会情勢により収入が左右されてしまうということであり、協会独自の収入を増やして安定的な収入体制をつくる必要がある。

デフバレー連盟と車椅子バスケット連盟の収入構造を比較すると、会費収入、事業委託収入、寄付金収入において大きく差が付いている。

まず、事業委託収入について考察する。

車椅子バスケット連盟は国体地区予選を開催しているため、そこから事業委託収入が入る。デフバレー協会が事業委託収入を増加させるためには、全国障害者スポーツ大会地区予選をデフバレー協会が開催する必要がある。現在は JFD・SC が担っているが、それをデフバレー協会が請け負うことで、約 400 万円の収入を得られることになる。

また、デフバレー協会が新しい大会を開催することも重要である。

デフのママさんバレー大会、高校でのデフバレー大会などをデフバレー協会が主催するべきである。

また、「手話バレー大会」のような新しい試みも収入と普及の両面で有効であると思われる。

この手話バレーは健聴者だけのチームも参加できるが、両者とも試合中は言葉でコミュニケーションをとってはいけないというものである。このような試みはデフと健聴者がお互いを理解する上で非常に有効であり、バレーボールやスポーツを通じて聴覚障害者と健聴者の垣根をなくし、よりよい社会を作ることにつながるはずである。

考えうる大会実施要綱としては、主催を日本デフバレー協会、後援を日本障害者スポーツ協会、東京都バレーボール協会とし、会社や財団の協賛・特別協賛があるということである。

またこの大会に付属するイベントとしては、有名人によるチャリティエキシビジョンマッチ、講演会、手話講座、チャリティオークションなどが考えられる。

またこのような大会は、TV、一般新聞、スポーツ新聞、雑誌などのメディアへの働き掛けも重要である。

この大会からの収入として考えられるのは、大会イベントロゴを開発して、

すべての PR、商品、その他に利用すること、イベント T シャツなどのグッズを販売すること、記念写真即売会、協賛社 VIK ( Value in Kind, 物品供与によるスポンサーシップ ) の商品の販売などである。このように、多くの新しい大会を企画・運営し、収入を得ることが重要であると考ええる。

次に寄付金収入について考察する。

車椅子バスケットボール連盟の寄付金収入は 1129 千円であり、収入項目としては最も大きくなっている。一方、デフバレー協会の寄付金収入は 0 である。

デフの人間は、口で話してコミュニケーションをし、PR することが苦手である。さらにデフバレーの信用・知名度がない中では集めたくても集められないということが現状である。デフバレー全国大会のときにパンフレットに寄付金募集の広告を出したが、集まったのは 10 万円程度であり、さらに継続的な寄付金とはならなかった。

このような現状を打開するために重要なことは、まずは当時者たちの努力である。小口の寄付を少しずつでも集める努力をしなければ、寄付金を集めることは出来ないだろう。また、それらの寄付金を継続的に得るためにも、健常者とのコミュニケーションを、失敗を恐れずに積極的に行っていくことが大切ではないかと考える。

また、専従職員を作ることも重要となってくる。デフバレー協会には専従職員はいない。一方、車椅子バスケットボール連盟は専属職員 1 名で月に 125 時間の勤務時間がある。専従職員を置いて、デフバレー関連の施策に専念して取り組んでもらうことは非常に重要だと考えられる。まず、専従職員がいないということは外部からの電話対応ができない。また、専従職員がいることでその団体の外部からの信用上昇にもつながり、信用が上がれば寄付金収入の増加にもつながるはずである。年間 500 万円ほどの予算で専従職員を雇うことで、デフバレー協会の信用上昇、そして寄付金収入や、他の収入の増加につながると思われる。

そして、このように社会的信用を高めるためには、デフバレー協会を NPO 化し、法人に移行する必要がある。

現在、JPC には、表 7 のように 51 競技団体(身体・知的・精神・聴覚の障害別競技団体)が加盟しており、そのうち 13 競技団体が NPO である。デフスポーツでは、日本デフバスケットボール協会が NPO である。

デフバレー協会が NPO 化するメリットは大きく分けて二つある。一つ目は、NPO 化し行政の認可を得ることで、デフバレー協会の組織や運営の信用を高めて、寄付金等収益向上につなげるという点である。デフバレー協会は、他のデフスポーツ競技団体と同様に聴覚障害者自身が運営している点で、身体障害な

ど他の障害の競技団体とは異なっている。一方で、役員が聴覚障害者であるため、電話ができず連絡が取りにくいことや、日本語の回答を作成できる役員が限られているためメールでの返信に時間がかかるなど、組織として対応に疑問符がつくことが往々にしてある。これは、聴覚障害者の中には、生まれつき助詞や接続詞の使い方がわからず日本語メールの作成が困難な人間がいるためである。このような問題はデフバレー協会だけでなく、別名コミュニケーション障害とも言われる聴覚障害者が運営する多くの団体に共通する問題である。

過去に、デフバレー協会へバレー代表選手の所属企業から、デフリンピック派遣にかかる寄付の申し出があった。しかし、企業はデフバレー協会が任意団体であるため寄付をせず、財団法人全日本ろうあ連盟に寄付をした。寄付金は日本選手団全体に使われ、バレー選手への還元は無きに等しかった。

ろうあ連盟は法人格を有しており、寄付金控除ができるメリットを持つ。かつデフ及び健聴者の常勤職員が多数いて、迅速な対応ができる団体である。しかし、このろうあ連盟は福祉団体であるため、スポーツ事業よりも福祉事業を優先し、デフスポーツの代表強化や派遣の予算などは皆無である。その結果、デフスポーツ関係者から年会費を取りつつ、代表チームや選手への協会等予算はJPCの財源の身に依存してしまっている。

デフバレー協会がNPO化するメリットの二つ目は、JPCから補助金や委託事業を委託できるようになることである。JPCは、2009年度から、チーム強化や国際大会派遣等事業を補助事業から委託事業に改め、JPCと加盟競技団体が委託契約を締結するよう変更した。また、実際はJPC加盟競技団体の約8割が任意団体である。これは裏を返せば、契約を履行しない競技団体とは契約を継続しないということ言うこともできる。よって、委託契約に移行したことにより、デフバレー協会の運営や財務の透明性を一層高めることが求められ、その対策の一環としてNPO化が有効であるとされる。

2009年度デフバレー協会は、任意団体として、JPCと計1200万円の委託契約を結んでいる。しかし、車椅子バスケットを比較対象とすると、矛盾点も見出される。デフバレー協会はNPO化して収益増加を目指しているが、車椅子バスケット連盟は任意団体であっても収益の確保が出来ている。つまり、車椅子バスケット連盟のような任意団体でも収益は得ているにも関わらず、デフバレー協会はNPO化して高い事務処理能力が求められるなどのリスクを冒す必要があるのだろうかという疑問もあるだろう。しかし、上記の二つのメリットを考えると、デフバレー協会はNPO化する必要があると考える。

表 9 JPC 所属の競技団体

|                              |
|------------------------------|
| 1 (財)全日本ろうあ連盟スポーツ委員会         |
| 2 NPO法人 日本障害者スキー連盟           |
| 3 NPO法人 日本知的障害者スポーツ連盟        |
| 4 全日本視覚障害者ボウリング協会            |
| 5 特定非営利活動法人 日本デフバスケットボール協会   |
| 6 特定非営利活動法人 日本視覚障害者柔道連盟      |
| 7 特定非営利活動法人 日本車いすダンススポーツ連盟   |
| 8 特定非営利活動法人 日本車椅子ビリヤード協会     |
| 9 特定非営利活動法人 日本障害者スキー連盟       |
| 10 特定非営利活動法人 日本知的障害者陸上競技連盟   |
| 11 特定非営利活動法人 日本盲人マラソン協会      |
| 12 特定非営利活動法人 日本アダプティブローイング協会 |
| 13 特定非営利活動法人 日本障害者スポーツ射撃連盟   |
| 14 JDVA (日本デフバレーボール協会)       |
| 15 ヨットエイドジャパン                |
| 16 日本FIDバスケットボール連盟           |
| 17 日本アイススレッジホッケー協会           |
| 18 日本ウィルチェアラグビー連盟            |
| 19 日本ゴールボール協会                |
| 20 日本シッティングバレーボール協会          |
| 21 日本チェアカーリング協会              |
| 22 日本ディスエイブルパワーリフティング連盟      |
| 23 日本ハンディキャップサッカー連盟          |
| 24 日本ボッチャ協会                  |
| 25 日本ろうあ者卓球協会                |
| 26 日本ろう者サッカー協会               |
| 27 日本ろう者スキー協会                |
| 28 日本ろう者テニス協会                |
| 29 日本ろう者バドミントン協会             |
| 30 日本ろう者ボウリング連合              |
| 31 日本ろう者水泳協会                 |
| 32 日本ろう者武道連合                 |
| 33 日本肢体不自由者卓球協会              |
| 34 日本視覚障害者サッカー協会             |
| 35 日本車いすテニス協会                |
| 36 日本車いすフェンシング協会             |
| 37 日本車椅子バスケットボール連盟           |
| 38 日本障害者バドミントン協会             |
| 39 日本障害者ローンボウルズ連盟            |
| 40 日本障害者自転車協会                |
| 41 日本障害者乗馬協会                 |
| 42 日本身体障害者アーチェリー連盟           |
| 43 日本身体障害者水泳連盟               |
| 44 日本身体障害者陸上競技連盟             |
| 45 日本知的障害者水泳連盟               |
| 46 日本知的障害者卓球連盟               |
| 47 日本聴覚障害者陸上競技協会             |
| 48 日本脳性麻痺7人制サッカー協会           |

### 第三節 「普及」

まず、デフバレー協会の会員数の増減を考察すると、会員数の増減は、ジャパンデフバレーボールカップの開催地に関係していると思われる。デフの居住地は、学校卒業後に就労の都合で大都市圏（東京圏、大阪、名古屋）に偏っている。女子では、デフバレーの一線を退いた選手が、近場で大会が開催される場合に限り、参加する傾向がある。これは、家庭を持つ、体力への不安を覚えるなどの理由により、高い交通費や宿泊費を払ってまで、地方開催の大会に出場する気持はないということであろう。彼女たちはママさんバレーのような、いわゆるお楽しみ型の選手であると言える。

男子では、聾学校にバレー部がある、大阪・愛知・茨城（筑波技術大学）の近県で大会を開催すると、当該チームやその OB が仲間に呼びかけチームを再結成し参加する傾向があるため、大都市圏で大会開催をすることで、安定した会員数を確保することができる。

デフバレーを普及させることにおいて最も重要なことは、聾学校の生徒を普及の第 1 ターゲットとし、聾学校体育連盟・校長会との関係を強め、学校関係者からニーズがある聾学校デフバレー全国大会をデフバレー協会と共同で開催し普及させていくことである。

また、普通学校に通う難聴者に対しては、デフスポーツの存在を知らないため、協会事業として、地域レベルでの普及啓発事業（手話バレーボール大会）を行う必要がある。また、日本バレーボール協会との連携を深め、デフバレーの周知及び一般チームに所属するデフ選手の情報提供を受ける仕組みを設ける必要がある。更なる強化・普及を進めるために、日本のライバルであるドイツを参考とし、健常者の関係団体（日本バレーボール協会等）と指導者派遣、人材交流、最新の強化策の提供を受ける仕組みを設けることが重要である。手話通訳士と協同し、手話が出来る監督や役員を育成することで、チーム力をアップさせることも重要であろう。

さらに、現状では社会人と聾学校のデフスポーツが分断されていることが大きな問題であると思われるので、それをどう融合していくかが今後の課題である。現状のままだとデフバレー選手になれる人が限られてしまっている。普通学級にいる難聴者バレー選手が、いつもは健常者のチームに所属していてもいいが、デフリンピックのときは参加してもらうなど、難聴者の活躍が必要である。一般のバレーボールチームで揉まれ高い技術を持っている彼らが参加する

ことで、デフバレーに好影響を与えるだろう。

しかし、このような難聴者をデフバレーに召致しても、レベルの高い選手に指導できるデフバレーの指導者がいないという問題もある。そこで、筆者は一般のアスレティック・トレーナー、フィジカル・トレーナー、指導者、手話通訳などを整備し、一般チームに劣らない環境を整えてきた。

実際にデフバレーの日本代表は、高校日本一レベルと互角に戦う実力を持っている。しかし、世界レベルでは身長 2m ほどの選手も多数おり、依然として世界の壁は厚い。このように、日本のデフバレーは他の一般チームと比べても実力で劣らないこと、そして世界には非常にレベルの高いチームがあることを多くの人々に知ってもらうことが重要である。デフバレーに対するレベルが低いというイメージを払拭し、選手にぜひ挑戦したいスポーツであると認識される必要があるだろう。

そのためにも、2012 年、2016 年に開催されるデフバレーの世界選手権を日本に誘致することが必要であるだろう。国民の 2.6% しかデフリンピックという言葉知らない日本において世界選手権を開催することで、デフバレーを広く国民に知ってもらい、普通学校に通う難聴者のバレーボール選手にもデフバレーへの参加を促す効果があると思われる。

また、ドイツデフバレー代表チーム関係者へのインタビュー結果から、普及の側面で日本が参考にできる点を考察すると、ドイツでは、幼少時から地域でデフスポーツに親しみ、試合を経て、ナショナルチームにたどり着く、ピラッドミッド型育成システムができています。この活動がデフリンピックの認知度向上につながっていると思われる。

日本では、聾学校バレー大会は中学部・高等部のブロック地区大会（関東・東海・近畿）と県内に複数の聾学校がある場合は県大会を開催している。全国大会は実施していない。聾学校の小学生時は、スポーツに触れるのは体育の授業だけでクラブ活動は行われていない。普及に関して、まず、聾学校高等部の全国大会を開催し、次いで中学部の全国大会を開催し、大会を通して聾学校校長会やバレー部顧問との連携を深め、小学部に指導できる形を作りあげていくことを目標としていきたい。

ドイツでは、ドイツバレー協会と DGS デフバレーとの組織間で交流があり、指導者派遣が行われ、競技レベルの向上、デフバレーの認知度向上につながっている感がある。日本では、日本バレーボール協会とデフバレー協会は関係をもっていない。男子代表チームの指導者は、V チャレンジリーグ所属しているが、就任にあたってはデフバレー協会役員の個人的な交渉努力によっている。日本バレーボール協会と組織的なつながりを持つことで、更なる強化・普及を

見込むことができる。

日本では、1 年間に 3～6 回（延べ 9～18 日間）の代表強化合宿を行う。常に資金の都合上、合宿の回数は少なく、かつ短期間であり、指導者が手話に触れ、手話を覚える機会とはならない。ドイツの指導者を参考にデフバレー協会が、健聴者の指導者向けに手話講習会の開催や、選手に会わせ手話に触れる機会を設ける等の工夫が必要になる。

## 第五章 結論

本研究は、筆者が長年デフバレーに対して当事者として携わってきた中で、近年のデフスポーツ全体の衰退傾向に問題意識を持つに至ったことから始まった。

第一章では、研究の背景と、研究の目的を述べた。研究目的は、わが国のデフバレーが抱える問題点を明らかにするとともに、デフバレーのさらなる普及・発展のための施策を提言することとした。

第二章では、研究手法として、デフバレーにおける「勝利」「市場」「普及」のトリプルミッションモデルを、日本のデフバレーの現状分析、車椅子バスケットとの比較、そしてドイツデフバレー代表関係者へのインタビューを用いて分析することを述べた。

第三章は研究結果である。日本デフバレー代表チームの「勝利」を分析した結果、女子は継続して結果を出しているものの、男子は近年成績が向上こそしているが、まだ改善の余地が大いに残されていることが分かった。また、代表選手の構成を変化させることで、代表チーム強化に繋がるという示唆を得た。

次に、日本デフバレー協会の「市場」を分析した結果、デフバレー応援 T シャツ作成など事業収入を得る努力が、協会の「市場」拡大に明確に繋がっていることが明らかになった。また、車椅子バスケットボール連盟の収入構造と比較した結果、デフバレー協会は、大会の事業委託収入や寄付金収入が現在得ることが出来ていないという課題があることが浮き彫りになった。

「普及」の面では、聾学校、社会人共に、男子デフバレーチームが非常に少ないことがわかり、代表選手を発掘する場が限られている事実が明らかになった。また、ドイツ代表チーム関係者へのインタビューにより、ドイツでは、18の州にデフの地域スポーツクラブが存在し、子供たちがデフスポーツに自然に取り組める環境が整っていることが明らかになった。

第四章では、今までの研究結果をもとに、トリプルミッション各要素を今後いかに拡大していくかを考察した。

「勝利」では、一般のバレーボールの指導者を召致すること、また、デフだけではなく、普通学校に通う身体障害者手帳は持っていないがデフリンピックへの参加資格を持つ難聴者の取り込みが必要であるとした。

「市場」では、特に車椅子バスケット連盟との比較から、事業委託収入・寄付金収入を伸ばす必要があるとし、国体地区予選をデフバレー協会が主催すること、手話バレーなど新しいデフバレー大会の開催することが必要であるとした。

「普及」では、「デフバレー」という競技を、健常者に広く普及する必要があるとし、そのためには 2012 年・2016 年に開催されるデフバレーの世界選手権

を日本に誘致することが重要であると考えた。デフバレーの世界大会を日本で開催できれば、これを機にデフバレーという競技を広く日本国民に普及することができるであろう。それは同時に、優秀な選手をデフバレーに取り込むことにもつながるのである。

このようなトリプルミッションの好循環策を発展させていく過程で、健常者とデフの間で幾多の協同が生まれる。これによりスポーツを通しての聴覚障害の理解が進み、ひいては共生社会の実現に寄与することができると思う。

また科学的な見地からも、障害の特性から体系的な記録や研究が残されていなかったデフスポーツにおいて、その文化を論文にまとめ、科学的分析を行い記録に残した本研究が、今後はさらなるデフスポーツ競技研究の基礎となることを期待したい。

## 謝辞

筆者は20年間デフバレーの選手・役員として携わってきたが、事業のマンネリ化、一向に上がらない認知度や資金不足など壁に当たり正に八方塞の状況であった。インターネットを検索していると早稲田大学で社会人向けの大学院がありスポーツビジネスやマネジメントなどを学べることを知った。しかし「知った」次から聴覚障害がある故の苦悩も始まった。頼れるのは文字情報だけであり、人脈を持っているはずもなく教授へのアプローチ方法がわからない。仲間に相談すると「健聴者にデフの気持ちが理解できるのか」「障害者スポーツとビジネス、障害を売り物にして金儲けか」返ってくる言葉は目に心地よくないものばかりだった。

それでも現状を打破するには「未知の世界に飛び込むしかない」と覚悟を固め、2007年初夏に平田竹男教授にメールを送ったことがきっかけとなり早稲田の門をくぐらせていただいた。同期には初めて聴覚障害者に接するという方が多く、筆者にとっても初体験の大学院生活は平坦ではなかった。多くの心理的葛藤や見えないバリアと格闘し、挫折を繰り返しながらここまで辿り着くことができた。いずれにしろデフのコミュニティから外に踏み出さなければ、決してできない経験や知識を得られ、素晴らしい志を持つ仲間と知り合えたことが何よりも嬉しい財産となった。

このことは聴覚障害のある筆者を早稲田に迎え入れていただき、温かくかつ辛抱強くご指導いただいた平田竹男教授のお陰であり、深く御礼及び感謝を申し上げます。副査の中村好男教授、岡浩一朗准教授からも温かいご配慮とご指導を賜り、心より感謝を申し上げます。

本研究を進めるにあたって、貴重な資料を提供していただいた全日本ろうあ連盟の久松三二所長及び職員の方々、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センターの及川力氏、全国ろう学校体育連盟の松田勝次理事長、日本車椅子バスケットボール連盟事務局、日本デフバレーボール協会の平田智哉理事、役員諸氏、デフバレーボール日本代表チームに深く感謝の意を表したい。

そして平田研究室の川名光太郎君、間仁田康祐君には多大なるサポートをいただき大変感謝している。また、昼夜を問わずいつでも手話通訳をしていただいた大崎紀代美さんに感謝を申し上げます。

平田研究室の3期生・4期生の皆さま、早稲田大学障がい学生支援室の皆さま、手話通訳等支援者の皆さま、本研究に携わったすべての方々に深く感謝の意を表したい。

最後に、健聴者の知識の最先端で学ばせていただいたという貴重な経験を生かし、デフバレーボール界の発展に寄与して行くことが、引いてはデフスポー

ツや聴覚障害者の福祉向上につながって行くという強い使命感を持ち続けることを記して謝辞とさせて頂く。

## 参考文献

平田竹男、中村好男，トップスポーツビジネスの最前線―「勝利」「マーケット」「普及」のトリプルミッション，講談社，2006

増山光洋，聴覚障害者バレーボールにおけるスポーツビジョンの研究  
―デフ全日本男子バレーボールチームの事例―，育英短期大学研究紀要，第25号，pp. 57-66，2008

中村有紀，デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査，筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター，2009

砂田武志，ろう者とスポーツ，現代思想 1996 年 4 月臨時増刊号，青土社，1996

Stewart, D.A. (1991), Deaf Sport: The Impact of Sports within the Deaf Community, Gallaudet University Press; 1 edition

Gannon, J.R. (1981), Deaf Heritage: A Narrative History of Deaf America, National Association of the Deaf.

Beisitzer, R.L. (1995), Handbuch des Deutschen Gehorlosen-Sportverbandes.

大竹浩二編，日本ろう者スポーツ協会 スポーツニーズ調査 2003 報告書，日本ろう者スポーツ協会，2005

日本ろうあ体育協会の歴史，日本ろうあ体育協会作成，1991)

宮里孝三，ろう児との出会い「追いつけ追い越せ」を合言葉に，1995

特集五感を生かせ！，コーチング・クリニック，5 月号，ベースボールマガジン社，1995

International Committee of Sports for the Deaf 公式HP  
<http://www.deaflympics.com/>

日本デフバレーボール協会 公式HP

<http://jdva.sakura.ne.jp/jdva/>

日本車椅子バスケットボール連盟 公式 HP

<http://www.jwbfb.gr.jp/>

INOUE TAKEHITO ON THE WEB

<http://www.itplanning.co.jp/what.html>

ウィキペディア

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ウイニング・パス>

## 附録

| デフバレーボールに関する調査     |            |             |       |       |                                         |           |                                      |
|--------------------|------------|-------------|-------|-------|-----------------------------------------|-----------|--------------------------------------|
| 質問<br>学校           | 1          | 2           | 3     | 4     | 5                                       | 6         | 7                                    |
|                    | バレーボール部の有無 | 部員数         | 練習回数  | 練習時間  | 練習上の問題点                                 | 指導者の経歴    | 指導上の問題点                              |
| 1 福岡県福岡聾学校         | 女子         | 6           | ほぼ毎日  | 平均2時間 | 部員数が少ない<br>ネットを使っている練習が毎日出来ない           | 過去に選手経験あり | 特になし                                 |
| 2 都立立川ろう学校         | 女子         | 9           | 週2～3回 | 平均2時間 | 場所が取れない                                 | 過去に選手経験あり | 部員数が少ないとチームが組めない時がある                 |
| 3 愛知県立豊橋聾学校        | 女子<br>男子   | 10<br>10    | ほぼ毎日  | 平均2時間 | 選手が集まらない<br>練習試合相手がいらない<br>練習時間が確保できない  | なし        | 特になし                                 |
| 4 和歌山県立和歌山聾学校      | 男女とも無      | 0           | —     | —     | —                                       | —         | —                                    |
| 5 大阪府立たいせん聴覚高等支援学校 | 女子<br>男子   | 6<br>1      | 週2～3回 | 平均2時間 | 行事等でなかなか練習時間が取れない                       | 過去に選手経験あり | 回答無                                  |
| 6 愛知県立一宮聾学校        | 女子         | 8           | ほぼ毎日  | 平均1時間 | 選手が集まらない<br>文化部員を重ねている生徒がいるため           | 過去に選手経験なし | 効率的な指導方法を学んで行きたい<br>小人数のためチーム練習が出来ない |
| 7 神奈川県立平塚ろう学校      | 女子         | 6<br>1      | ほぼ毎日  | 平均2時間 | 選手が集まらない<br>練習試合相手がいらない<br>ゲーム形式練習ができない | 過去に選手経験なし | 後継者がいない                              |
| 8 兵庫県神戸聴覚特別支援学校    | 女子         | 3           | 週2～3回 | 平均2時間 | 部員数が少ない<br>試合参加の機会が少ない                  | 過去に選手経験あり | 特になし                                 |
| 9 埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園 | 女子         | 11          | ほぼ毎日  | 平均2時間 | 回答無                                     | 過去に選手経験あり | 回答無                                  |
| 10 高知県高知ろう学校       | 男女とも無      | S50年に廃部     | —     | —     | —                                       | —         | —                                    |
| 11 秋田県立聾学校         | 男女とも無      | S60年より前に廃部  | —     | —     | —                                       | —         | —                                    |
| 12 千葉県立館山聾学校       | 男女とも無      | 最初から設置していない | —     | —     | —                                       | —         | —                                    |
| 13 島根県立浜田ろう学校      | 男女とも無      | 最初から設置していない | —     | —     | —                                       | —         | —                                    |
| 14 岩手県立盛岡聴覚支援学校    | 男女とも無      | 最初から設置していない | —     | —     | —                                       | —         | —                                    |
| 15 長崎県立ろう学校        | 男女とも無      | S59年に廃部     | —     | —     | —                                       | —         | —                                    |
| 16 大阪府立聴覚支援学校      | 男女とも無      | 最初から設置していない | —     | —     | —                                       | —         | —                                    |

| デフバレーボールに関する調査 |                  |                            |                                      |                         |             |                               |                      |                     |
|----------------|------------------|----------------------------|--------------------------------------|-------------------------|-------------|-------------------------------|----------------------|---------------------|
| 質問<br><br>学校   |                  | 8                          | 9                                    | 10                      | 11          | 12                            | 13                   | 14                  |
|                |                  | プロ指導者によるバレー教室に参加したいか       | 公式戦参加の有無                             | ろう学校全国大会があれば出たいか        | デフリンピックの知名度 | デフリンピックへの中学・高校生参加できることを知っているか | 日本代表チームの活動や戦績を知っているか | 日本デフバレーボール協会を知っているか |
| 1              | 福岡県福岡聾学校         | 参加しない<br>生徒の意欲と技術不足のため     | 機会がない<br>部員数少ないため                    | はい                      | 知っている       | 知っている                         | 知らない                 | 知らない                |
| 2              | 都立立川ろう学校         | 参加したい                      | 地区ろう学校大会<br>地域の一般学校大会<br>自治体主催の障害者大会 | はい<br>条件が合えば<br>(場所・日程) | 知っている       | 知らない                          | 知っている                | 知っている               |
| 3              | 愛知県立豊橋聾学校        | 参加したい                      | 地区ろう学校大会                             | はい                      | 知っている       | 知っている                         | 知らない                 | 知らない                |
| 4              | 和歌山県立和歌山聾学校      | ――                         | ――                                   | ――                      | 知っている       | 知っている                         | 知らない                 | 知らない                |
| 5              | 大阪府立たいせん聴覚高等支援学校 | 参加しない<br>時間がないため           | 地区ろう学校大会<br>地域の一般学校大会                | はい                      | 知っている       | 知っている                         | 知っている                | 知っている               |
| 6              | 愛知県立一宮聾学校        | 参加したい                      | 地区ろう学校大会                             | はい                      | 知っている       | 知らない                          | 知らない                 | 知っている               |
| 7              | 神奈川県立平塚ろう学校      | 参加したい<br>条件が合えば<br>(場所・日程) | 地区ろう学校大会                             | いいえ<br>金銭的に難しい          | 知っている       | 知っている                         | 知っている                | 知っている               |
| 8              | 兵庫県神戸聴覚特別支援学校    | 参加したい                      | 地区ろう学校大会                             | はい                      | 知っている       | 知っている                         | 知っている                | 知っている               |
| 9              | 埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園 | 参加したい                      | 地区ろう学校大会<br>地域の一般学校大会                | はい                      | 知っている       | 知らない                          | 知っている                | 知らない                |
| 10             | 高知県高知ろう学校        | ――                         | ――                                   | ――                      | 知っている       | 知らない                          | 知らない                 | 知らない                |
| 11             | 秋田県立聾学校          | ――                         | ――                                   | ――                      | 知っている       | 知らない                          | 知らない                 | 知らない                |
| 12             | 千葉県立館山聾学校        | ――                         | ――                                   | ――                      | 知っている       | 知っている                         | 知らない                 | 知っている               |
| 13             | 島根県立浜田ろう学校       | ――                         | ――                                   | ――                      | 回答無         | 回答無                           | 回答無                  | 回答無                 |
| 14             | 岩手県立盛岡聴覚支援学校     | ――                         | ――                                   | ――                      | 知っている       | 知らない                          | 知らない                 | 知らない                |
| 15             | 長崎県立ろう学校         | ――                         | ――                                   | ――                      | 知っている       | 知っている                         | 知らない                 | 知らない                |
| 16             | 大阪府立聴覚支援学校       | ――                         | ――                                   | ――                      | 知っている       | 知らない                          | 知らない                 | 知らない                |

| デフバレーボールに関する調査 |                  |                                    |                                                               |
|----------------|------------------|------------------------------------|---------------------------------------------------------------|
| 質問<br>学校       |                  | 15                                 | 16                                                            |
|                |                  | ジャパンデフ<br>バレーボール<br>カップを知って<br>いるか | その他                                                           |
| 1              | 福岡県福岡聾学校         | 回答無                                | 特になし                                                          |
| 2              | 都立立川ろう学校         | 知らない                               |                                                               |
| 3              | 愛知県立豊橋聾学校        | 回答無                                | 特になし                                                          |
| 4              | 和歌山県立和歌山聾学校      | 回答無                                | 特になし                                                          |
| 5              | 大阪府立たいせん聴覚高等支援学校 | 知っている                              | ろう学校と社会人ろう者バレーの連携が見られない<br>社会人バレーは「ろう協会」主体であり、構成やシステムがよく分からない |
| 6              | 愛知県立一宮聾学校        | 知らない                               |                                                               |
| 7              | 神奈川県立平塚ろう学校      | 知っている                              | 日本バレーボール協会と別組織のため、なかなか支援が得られない<br>日本国民にもっと周知を                 |
| 8              | 兵庫県神戸聴覚特別支援学校    | 知っている                              | さまざまな機関の協力が得られ、個人負担が少なく済む全国大会の開催を                             |
| 9              | 埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園 | 回答無                                | 障害者国体の予選会が持ちまわしで運営されているが、継ぎが不十分で確認等に時間を取られる。                  |
| 10             | 高知県高知ろう学校        | 回答無                                | 社会人デフバレーチームに体育館貸し出しを優先に行っている                                  |
| 11             | 秋田県立聾学校          | 回答無                                | バレーボール部がない聾学校にデフバレーを詳しく紹介する機があれば興味を持つ生徒が出てくると思う               |
| 12             | 千葉県立館山聾学校        | 知らない                               | デフスポーツを地域総合型スポーツクラブの枠組みに位置づけることは可能か、地域に拠すれば健聴者との交流            |
| 13             | 島根県立浜田ろう学校       | 回答無                                |                                                               |
| 14             | 岩手県立盛岡聴覚支援学校     | 回答無                                |                                                               |
| 15             | 長崎県立ろう学校         | 回答無                                | 特になし                                                          |
| 16             | 大阪府立聴覚支援学校       | 回答無                                |                                                               |